長浜☆戦国時代

鳴瀬　弓月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
長浜☆戦国時代

【Ｎコード】
Ｎ１２４７ＢＡ

【作者名】
鳴瀬　弓月

【あらすじ】
豊かな自然に恵まれた美しい小国、長浜国。この国独自の制度である“お旗女”候補の朝芽は、修行先での早春の一日、師の求めに応じて泉に向かう。そこでは一人の若き武人が、彼女の目の前で水中に身を沈めていた……。
時は室町・戦国時代。長浜国軍武将にお旗女（はため）として仕官した“私”こと少女朝芽の、恋と戦場の冒険。

第一章　出会いは冷たい泉の中で（前書き）

この物語は、日本史を参考にしたフィクションです。実在の地名、歴史、人物とは関わりがございませんのでご了承ください。

第一章　出会いは冷たい泉の中で

（1）

つい先日まで豪雪に硬く閉ざされていた杣道(そま)が、今では柔らかな陽春の息吹に包まれていた。
枝々では小鳥がにぎやかにさえずり合い、風にはじける新芽の香りが心地よい。
深い谷間に鶯がまた、ピピピピピーッ、と鋭く啼いた。
奥山にも、春は忘れずに訪れてくれる。
長浜(ながはま)国。華正(かせい)元年、戦国時代。
山を下りればそこは修羅の業が渦巻く戦乱の巷(ちまた)。血で血を洗う人の世の荒野。しかしそれを想うには余りに平和で美しい、春の仙郷だった。

山道を上りつめると、目の前の景色が厳しく変わる。
柔らかな新緑の木々は影を潜め、代わって荒々しい山肌が深い谷間に向かって落ち込んでいる。道は細かいガレ場となって、水墨画のようにそびえたつ険峻な山々を見上げながら、青く沈む谷底目がけて続いている。目的の泉が、すぐそこにあった。
私は、手にした甕を落とさないように持ち直すと、崖の細道を注意して下りて行った。
この谷の泉で、師の求めに応じて澄んだ水を汲むのが私の仕事である。
透き通った香りのこの深山の泉水は、師が立てる舶来の茶の湯に

最適なのだそうだ。そしてその茶をふるまわれるのは、十里の彼方にある長浜本城からの“お客人”が来る時と決まっていた。

「朝芽(あさめ)、聞いた？　今日のお客人はお武家様って噂よ」
社殿を出るとき、親友の水杖(みなづえ)が興奮した面持ちでささやいてきた。
「それも四人ですって！」
「四人も？」
「どんな方かしら。私たち、お目にとまれるかしら？」
愛らしい頬に手を当てて、水杖がうっとりとつぶやく。
私は、そんな親友のしぐさに思わず微笑みながらも言った。
「あまり期待しちゃだめよ、水杖。この社には五十名ものお旗女(はため)候補がいるのよ。お役をいただくには、まずはお師様のご推挙が必要だし……」
それに、と後の言葉を心でつぶやく。

私たちの一生がかかってくるのよ。

そう言う代わりに「行ってくるね」と声をかけ、少しショボンとした友の顔を気にしながらも、私はいつもの山道を歩き出したのだった。

長浜は、日の本有数の巨大な湖水に面した小国だ。気候は温暖、風土は豊かで、道行く人々の顔も明るい。湖から上がる新鮮な魚介類と肥沃な土地に実る農作物は、“万年豊作国”の名にふさわしい潤いを下々の生活にまでもたらしている。
豊かさの元はそれだけではない。
長浜国守護、土岐(とき)氏は代々名君の家柄で、現領主、土岐定照(さだてる)様もまた、仁愛の心根優れたお方よと、専らの評判だった。
自ら城を出ては農村に交わり、親しく治水や収穫の悩みを聞きと

っては年貢に反映させ、苦しむ民草を少しでも減らそうと奮闘されている。
また政治や軍学にも詳しく、おそばを固めるご家老衆も、みな、名うての逸材ばかりであった。

沃土に加えて京師（みやこ）に近い交易の要衝。近隣諸国がこれほど“おいしい領地”を見逃すはずはない。
小国であるのが更に食指をそそるのか、甲兵（こうへい）の波はこの名君の美しい国にも容赦なく押し寄せていた。国境付近では今もなお戦闘が続き、近隣国主の悪意をくんだ浪人たちが、夜盗や山賊となって街道の平和を脅かしていた。
しかし、長浜国はびくともしなかった。
肥沃な土地と名君に育てられ、代々続く優れた武人たちを将と仰ぎ、誇りと忠誠心を強く持った長浜軍は、すさまじく強かったのである。彼らは一丸となって愛する国土を守ろうと、押し寄せる世の波にあらがった。そして多くの戦場で、美談や武勇伝と共に勝鬨（かちどき）を上げた。
それは、今も続いていた。

昨年の秋、私は親友の水杖と共に故郷を出て、深山霊峰のふもとにある観滝社殿（みたきしゃでん）…武人お旗女養成所…に奉公に上がったのだった。お旗女（はため）とは、長浜軍武将専属の侍女の総称で、軍営における武人たちの日常の世話をうけたまわる。勿論戦場にも同行し、本陣にて主のお世話をつききりで行うため、時には命を投げ出す覚悟も必要となる。そのため、お旗女と主の武人の間には、強い信頼関係がなによりも不可欠だった。
良き相性の主にお仕え出来るか、それが私たちお旗女の人生を決めると言っても過言ではない。
深山霊峰のふもとで日々の厳しい訓練に耐え、一通りの武術と儀式作法をたしなみ、一人前と認められると初めてお旗女候補として

名前が本城に送られる。その後は社殿の師のかたわら近く仕えながら、主となるべき運命の武人に選ばれる時を待つ日々だった。

私も、水杖も、すでに候補としての名乗りはすませていた。

どちらかが…運が良ければ両方が…いつ選ばれても不思議はない。覚悟はすでに決めていた。

だけど私は水杖ほど今日のご使者に関心を持つことができなかった。むしろ、客人がただの、いつものご城主様の時候のお使者であってほしいと願っていた。

私は、怖いのかもしれない。

「いやね、こんなことを考えるなんて」

我知らず思いを口に出し、ハッとあたりを見回す。誰もいない深山の崖道であることを思い出し、ほっと安堵の息をつく。

「さあ、早く戻らなくちゃ！」

気を取り直し、足を踏み出した私は、目的の泉の方を見て思わず息をのんだ。

誰かが水の中に入っている。

一目で武人だと解った。こがね色の胴巻鎧（どうまきよろい）に篠小手（しのごて）の軽装。歳は若い……私より少し上と言ったところか。青ざめた顔で水中を見つめ、そのままざぶざぶと泉の中へと入っていく。

入水自殺だ！

「あっ…だめ…っ！」

思わず叫んで、私は駈け出した。足元で砂が崩れて滑りそうになる。何度も転びかけては体を立てなおし、私は必死で崖を駆け降りた。

滑り込むようにして泉のほとりの砂地に駆け込み、甕（かめ）を…それで

もそっと下ろす理性はまだ残っていた…地面に寝かすと、泉の中に飛び込んで行く。

冷たい。

陽春とはいえ、深山の谷間にこうこうと湧き出る泉水は、足がちぎれるほどに冷たかった。

それでもためらう暇はなかった。見る間に腰、胸と上がる泉水を掻き分け、わらじに付いた埃で澄んだ水が濁るのもかまわず、彼方の人影に突進する。

泉の人影は止まらない。もう肩までの深さまで進んでいた。栗色の髪が顔の半分を隠すくらいにうつむいて、思いつめた様子で両腕を水の中に入れている。今にも顔をつけて沈んでしまいそうだ。私の全身に鳥肌が立った。

「死んじゃ駄目ぇーっっ！！」

夢中で叫びながら水面をたたく。深みにはまり、思うように足が進まない。

人影がはじかれたように顔を上げた……と思った瞬間、足が滑って、私は泉の中に倒れ込んだ。

バシャン！と派手な音が聞こえ、一気に視界が青くなる。頭の先までしびれるような冷たさだ。あわててもがくが、社衣が体中に巻きついてうまくいかない。溺れる、と思った瞬間、力強い腕が私の腰に回り、ぐいっと水の中から引き揚げてくれた。

「おいおい、大丈夫か！」

びっくりしたような声が聞こえた。激しくせき込む私の顔が水につからないように、たくましい腕がしっかりと支えてくれている。

私はそのまま抱えられるようにして、泉のほとりへと戻ってきた。

（2）

「あ…ありがとう、ございます」
殆ど引きずり上げられるようにして、泉のほとりの草地に這いあがった私は、喘ぎながら頭を下げた。
「苦しくないか。水は飲んでないか？」
肩で息をする私の側にしゃがみこんだ相手は、心配そうにのぞきこんだ。彫りの深い顔。すっと通った鼻筋。細身の長身、日に焼けているがきめ細かい素肌の持ち主で、一瞬はかなげな印象も受けるが、意志の強そうな顎の線や、鎧の上からも解る引き締まった体躯を持つ、堂々とした武人だった。
涼やかな瞳が、真っ向から私を見つめる。一度に頬が熱くなった。
「大丈夫です……」
「寒いだろ。何か着る物を……」
そう言って立ち上がった黄金色の鎧が、日の光に反射してきらりと光った。
そこからも途切れることなく泉水が滴り落ちている。
その瞬間、私はなぜ自分がこんなことになったのかを、鮮烈に思い出した。
「あっ、あのっ、」
あわてて後ろ姿に声をかける。
「お助け下さり、ありがとう存じまする。でも、あなた様が死んではなりません！　入水だけはおやめ下さい。私、あなたが水の中に入るのを見て、それで、つい……」
言葉が途切れる。
相手は、真ん丸な目をして振り向いていた。
「入水？　俺が…？」
「……違うの……？」
「……。」
沈黙……。

次の瞬間、若き武人は、腹を抱えて大爆笑した！！

はじけるように笑う相手を呆然と見つめる私の上に、突然大音声が降ってきた。

「コラァーッ凌介！！　いつまで水遊びしてんだお前はよぉッ！早く行かねぇと日が暮れちまわぁ！」

仰天して空を見上げると、はるか高い山肌の岩場に、今一人の武人が仁王立ちになってこちらを見下ろしているのが見えた。目の前の青年とは対照的な、深紅の戦服の、派手ないでたちの若者である。頭を振り立てて喚くたび、そこに豪快に巻かれた華やかな鉢金が、ぶんぶんと鮮やかな尾を引いている。

「おう！　影芳か！　すまん！」

叫び返した黄金色の鎧が、ハッとしたように私を見る。

「すまないが、これから主命で急ぐところがある。びしょぬれの君を置いていくのは気が引けるが…」

「大丈夫です。一人で帰れますから」

申し訳なさそうな相手の言葉をやんわりと遮る。これ以上心配をかけてはという思いもあった。

「そうか。気をつけてな」

私が微笑むと、青年も、笑顔になった。笑うととても魅力的な表情になる。思わず心臓が高く鳴った。

「あ、ちょっと待ってろ。」

言うや否や、彼は跳ね起きるように振り向くと、はるか高い人影に向かって大声で怒鳴った。

「影！　荷の中に単衣があっただろッ！　投げてくれッ！」

「なんだと！？　これは先方への土産にと備中殿が…」

「いいんだよ！　箪笥に着せるために持っていってもしょうがねえって！　早く寄越せ！」

渋々、といった感じで、美しい包みが投げ落とされる。器用にそ

れを受け取った若者は、私の元に駆けてくると、
「これ、着なよ」
そっと手渡してくれた。
戸惑う私ににっこり笑うと、そのまま踵(きびす)を返し、見る間に崖道を駆け上がっていく。重い鎧から雫が散るたび、黄金色の光が空に散った。その姿が美しいほど軽々と岩を伝って友人の元へ駆け上がると、二人はそのまま崖道にいた馬に飛び乗り、鮮やかな手綱さばきで駆け去って行った。

午後の斜陽を雲が遮り、谷間にさっと影がさした。私は急に一人になった寒々しさを感じながら、急いで体を起こした。凌介と呼ばれた黄金鎧の青年の笑顔が温かくよみがえり、また頬が熱くなる。
入水じゃなかった安堵もあった。じゃあなぜあのようなところに？　何をしていたの？　出来れば、理由も聞いてみたかったけど、それにしても、止めに入った私が逆に助けられたなんて、あまりに格好がつかないわ……。
取りとめのないことを思いながら、頂いた包みをそっと開くと、中にはとても美しい翡翠色の着物が入っていた。
思わず感嘆の声を上げる。すぐに手を通すと、まるで羽根のように軽く、ふんわりとした着心地が、春風のように暖かだった。

いつもの時刻より大幅に遅れて社殿に帰り着くと、門の前で親友の水杖(みなづえ)が、心配そうに迎えてくれた。
「いったいどこへ行っていたの？　心配したんだから！　お師様も気がかりそうにさっきまで覗いていらしたけど、ちょうど今お客人が来て…」
ああ、間に合わなかったのだ。これでも思いきり山道を駆け戻ってきたのだけれど。

社殿では、定められたものしか着衣が許されない。硬い社衣に着替え、髪を整えていたため遅くなってしまったのだ。
あの美しい翡翠の着物は、あたたかな思いと共に部屋の文机においてきた。凌介と呼ばれた青年の、屈託のない素敵な笑顔。私を抱え上げてくれた腕の力強さ。思い返すたびに、まだ頬が熱くなる。
主命によるお使いの途中と言っていた。あのもう一人の若者も同様、いずれ長浜軍の武人の一人だろう。私がお旗女として戦場に出る身ともなれば、いつかまた会うこともかなうのだろうか。
「ご泉水、間に合わずに申し訳なかったわ。お師様はお怒りかしら。」
沸き起こる思いを振り払うようにつぶやく。もう考えちゃいけない。もう思い出してはいけない。
二度と会うことはない。熱い思いを冷たくねじ伏せる。
「バカね、茶の湯よりも朝芽(あさめ)の方が大事に決まってるじゃない。無事帰ってきたと解れば笑って迎えてくださるわよ」
ほっとしたように笑う水杖の存在を、私はありがたく思った。この友がいなければ、そして厳しくも温かく見守ってくれている師の存在なくしては、とてもここまで苦しい修練の日々を切り抜けられなかったと思う。
その彼女が、不意に声をひそめた。
「それでね、来たわよ」
「え？」
「お武家さまが四人。」
「そう……」
「控え所は大騒ぎよ。一度に四人もお旗女(はため)に上がるのは、初めてですって。四人の中には、いかにも恐ろしげな髭の親父もいたっていうけど、構うものですか。ああ、いいわね。私も選ばれないかしら！」
水杖は、華やかな長浜のお城や、交易も盛んな城下町を訪れることに、常々憧れていた。城勤めともなれば、その思いもかなう。過

去には召された武人に可愛がられて、ついにその妻の座を射止めた幸運なお旗女もいたと言う。身寄りもなく、帰る家もない私たちにとって、新しい居場所を夢見るのはごく当然のことだろう。
そうは解っていても、私はやはり、心の臓をギュッと掴まれたような強張りをほどくことができなかった。
御指名から完全に外れるまでは…
「一緒に、いけるといいわね！」
水杖が、私の思いとは対照的な、屈託のない笑顔を向けてきたとき、澄んだ鐘の音が社殿に響き渡った。
「お召しだわ。決まったのよ！　さあ、早く大広間に行きましょう！」
水杖が興奮したように言って私の手を引き、美しく掃き清められた社殿の内庭を走りだした。

（3）

七十畳はあろうかと思われる広々とした大広間が、水を打ったように静まり返っていた。
五十名からの、お旗女候補の女性たちが、美しくそろって叩頭している。私も水杖も、緊張した面持ちのまま、低く頭を畳に下げて、運命が決まる瞬間を今か今かと待ち続けていた。
辺りはしわぶき一つ、衣擦れの音ひとつ聞こえない。ぴたり、と固まった静寂が、あたりを支配している。
庭でさえずる小鳥の声が、まるで切り離された世界から聞こえてくるようだ。
またひとつ、澄んだ音で鐘が鳴った。
その瞬間、ふすまが開いて、私たちの老師を先頭に、四人の厳めしい鎧姿の武人が入ってきた。もちろん顔を上げるわけにはいかな

いので、過去の経験からの推察である。
着座の気配。部屋の空気が、ピーンと張り詰める。
老師の、穏やかだがよく通る声がした。
「此度、守護職(しゅごしょく)土岐定照様のお達しにより、武人お旗女の選別の運びと相成った。ただいまより四名の名を申す。呼ばれた者は、迅(と)く、隣室へまいりませい。」
すぐ隣で、水杖がかすかに身じろぎした。彼女の緊張も最高潮に達している。
「水杖」
「ハイッ」
親友の絞り出すような声がした。
選ばれた。すごい。良かったね、水杖…！
思わずこみ上げるものを噛みしめた時、老師の声が厳しく呼んだ。
「朝芽」
ハイッ、と、反射的に声が出た。修練のたまものである。しかし私の魂は衝撃で消えそうになっていた。
選ばれた……？　私が……！？
「……以上四名。速やかに参れ」
老師の姿が消えると同時に、広間中にざわめきがわきおこった。緊張が一度に緩む中、私はうつむいたまま汗だくになって固まっていた。後の二人がだれだったのか、それすら頭に残っていない。
「行こう、朝芽！」
水杖が私の腕をつかむ。はしゃいでいるのかと思いきや、その顔は意外にも厳粛だった。いざ呼ばれ、任の重さを改めて実感したのかもしれない。私は茫然と、されるがままに立ち上がった。

「朝芽でございます。まかり越しました」
挨拶に答えて、老師の声が呼んだ。私はこわばる手を励ましながら、ふすまを開けた。作法通りに、下座に控える。水杖も、別の部

屋でどきどきしながら待っているはずだ。これから各々の部屋で、新しい主との対面が行われる。
老師は、窓辺に佇(たたず)んでいた。逆光で、表情はよく見えない。しかし、いつもと変わらぬ穏やかなそのたたずまいが、私の緊張を解きほぐし、心の震えを止めてくれた。
部屋には西日が差しこみ、窓の外には鮮やかな山の夕暮れが見えた。残照を受けて、山々が黄金色に燃えている。それは、昼間の青年の鎧から散った、金色の雫を思い出させた。烏がねぐらに帰っていく。奥の深い谷ではすでに、夜の帳を迎えていた。
半年をかけて見慣れてきたこの奥山の美しい景観も、今日が見おさめになる。お旗女に選ばれた者は、その主と共に速やかに社殿を出なければならない。これはもう、例外のない掟であった。
「朝芽。泉からは無事戻ったか。」
老師の声に私は小さく頷いた。親とも思いお仕えしてきたこの恩師とも、別れの時が近づいて来たのだ。不意に寂しさがこみあげて来る。
「今日まで、良く励んでくれた。此度の選では、真っ先にそなたの顔が浮かんでおった。そなたの主は、わしが選んだ。良き運命の出会いとならんことを祈っておる。……健やかにな。」
「お師様も……どうか、おからだ大事に……」
不意に感情があふれ出し、視界が涙でかすむ。老師は少し頷き、すっと姿勢をただすと静かに部屋を出て行った。
この瞬間、私は老師の元を離れ、長浜軍武将専属の正式なお旗女となったのである。

自分の主がどのような武人なのか、それは今は問題ではなかった。どんな未来が待っていようと、命をかけてお仕えする。それが私の運命なのだ。
心が引き締まる。今までの不安がうそのように消えていく。
私は新しい未来へ踏み出すその瞬間を、ただひたすら待ちうけて

いた。
ふすまが開いた。
いよいよ対面の時が来たのだ。
私はその場に膝をつき、主を迎える礼をとった。
「やあ、君が新しい侍女頭だね。よろしく頼む。」
声を聞いた瞬間、私は愕然と目を見開いた。
そこには、同じく目を丸くして絶句する、あの黄金色の鎧の青年が立っていたのだった。

〈続く〉

第二章　旅立ちの刻（とき）

（1）

沈黙の部屋を、夕(ゆう)ガラスの鳴き声が鋭く渡って行った。
呆然と見つめあう二人の影が、長く微動だにせず伸びている。
泉で私の心に強烈な印象を残して去った、黄金鎧のたくましい若武者。
もう、二度と会うことはないと思っていた。
それが今、お仕えすべき主として目の前に立っている。
向こうも仰天したようだ。軽快に話しかけてきたのが一転、口を開いたまま絶句している。
しかし、その沈黙は長くは続かなかった。
相手の顔があまりに驚いていたので、私は思わず微笑んでしまったのだ。
『そなたの相手は、わしが選んだ』
老師の声がよみがえる。
運命。数奇な運命。
はじけるように、相手からも笑みがこぼれた。

「……君だったのか」
ひとしきり明るい笑い声が続いた後、青年は屈託なく話しかけてきた。あの魅力的な笑顔がまた現れて、心が温かく解きほぐされていく。
「朝芽(あさめ)と申します。以後、よろしくお導きを」
「いい名だな、朝芽。俺は出石凌介(いづしりょうすけ)。長浜軍長柄足軽(ながえあしがる)一番隊隊長だ。高砂備中守(たかさごびっちゅうのかみ)様の差配下にいる。普段は天槻(あまつき)城で、長柄隊の調練(ちょうれん)を担

当している。」
長柄隊は、長槍部隊だ。守攻の中核を担う強力な中堅軍である。
天槻城は、領主様のいる長浜本城から南東五里のところにある平山(ひらやま)城で、御城下を見下ろす小高い丘の上にあり、一の砦とも言われている。
何度も頭に叩き込んだ情報を引き出す。私の仕事は、すでに始まっていた。

「はは、いいさ。最初からそんなに飛ばすなって。俺もお旗女さんを置くのは初めてなんだ。お互い、ゆっくり慣れていけばいいさ」
「かしこまりました、出石様」
「俺のことは凌介と呼んでくれ。だが目付(めつけ)の前では『隊長』だ」
「はい」
落ち着いた声音。良く透る低い声だった。浮き足立っていた私の心が、ようやくこの現実に追いついてきた。
「凌介様」
「ん？」
「あの時、どうして泉におられたのですか？」
思い切って尋ねる。出会いのきっかけに感謝しつつも、疑問だけがずっと残っていたのだ。
「ああ、あれは……」
相手は恥ずかしそうに口元をほころばせると、ちょっと下を向いていたが、
「……落としちまってさ」
「えっ」
「俺たちの上役、高砂備中様(たかさごびっちゅう)の御免状(ごめんじょう)……社殿に入る許可証みたいなものだが、影芳(かげよし)の奴が見たいと言うから、鞍の上から投げたんだよ。それが手元が狂ってあの泉にどぼん。」
ああ、それであんなに深刻な顔で、泉の中を見つめていたのか。

「参ったぜ。なんせこっちは初参者だ。追い返されてはと真っ青になってね。幸い、老師殿が俺たちのことを覚えていてくれて……影芳はあの風体だからな……それで無事社殿に入れたわけ。」
免状は結局見つからなかったそうだが、結果良しと言うことさ、と凌介様は明るく笑った。
「朝芽が飛び込んできたときは、本当に驚いたよ。叫び声と共に姿が見えなくなって、あっ、まずい溺れたかッて、夢中で引き揚げたんだ。まさか俺の入水を心配していたとはね。……あれから大丈夫だったのか？　急いでいたとはいえ、一人残して、すまなかったな。」
いたわるようなまなざしに、思わず目を伏せる。きっと、ずっと心配してくださっていたのだろう。

初めて出会った印象は間違いではなかった。優しく、たくましい武人。私にとって、これ以上の主の君があるだろうか。老師様は私にとって最高の主を選んでくださったのだ。少々内気で、思い込むことも多い私の性格をよく見ていて下さったのだ。
「さあてと。」
何か張り詰めていたものを吐き出すようにして、凌介様は私を見つめた。
「行こうか、朝芽。」
私はしっかりと視線を返し、大きく頷いたのだった。

「朝芽～～～～！」
身支度を整えるため、しばし凌介様と別れて部屋に戻ってきた私を迎えたのは、顔をゆがめた水杖（みなづえ）の姿だった。
「ど、どうしたの、水杖！？」
「私の主の君が……っ」

半泣きで口走るのをなだめつつ、ようやく話を聞き出すと、奇しくも彼女の主の君は、凌介様と共にいた、あの華やかな武将に決まったらしい。

名前は真咲影芳（まさきかげよし）。派手ないでたちや猛々しいしゃべり方から推し量られるように、性格も剛胆で荒々しく、陣屋では“烈火将（れっかしょう）”の異名を持つと言う。

「朝芽の主様は“流水の出石（りゅうすいのいづし）”と呼ばれているんですって。出石様は冷静沈着、反対に影芳さまは大胆豪放で、部下にもかなり容赦のないお方ですって。どうしよう朝芽、私毎日怒鳴り飛ばされちゃう！」

目にも鮮やかな胴巻姿で堂々と現れた真咲影芳は、まるで百花の王のように見えたと言う。しかし、この君ならとときめいた水杖の期待を思い切り裏切って、初対面からビシバシしごかれたそうだ。

足は速そうだが細すぎる。声が小さい！　女だからって特別視はしねぇ。心してついて来いや！

一人二役の迫真の演技でその時の模様を再現する水杖に、思わず私は笑ってしまった。

「もう、人が真剣に悩んでるのにっ」

そう言って膨れた水杖だったが、本心では真咲様に惹かれているのが見て取れた。顔色で解る。文句を言いながらも、紅潮した頬や、生き生きと主の君についてしゃべる口元がそれを証明している。

私たち、良い主に巡り合えたのね。

私は心の中でそっとその思いを抱きしめた。

真咲様は長柄足軽二番隊長を務めている。凌介様とは同じ軍務に就くため、私と水杖も同じ足軽長屋に詰めることになる。一度は別れを覚悟した親友と、これからも行動を共に出来る予感が、嬉しかった。

ひとしきり愚痴って憂さが晴れたのか、水杖は私が荷物をまとめ

るのを手伝いはじめた。
「本は置いていくわね。これはどうする？」
翡翠(ひすい)色の単衣。私は少し迷ったが、結局荷物の中に入れた。主の君からはじめていただいたお着物だから、と。
つづらの中身をまとめていた水杖の手が止まった。視線の先には、美しい螺鈿(らでん)の蒔絵箱(まきえばこ)。中では血のように赤い紅玉が、まるで意志を持つ者のように妖しく輝いている。
「朝芽、これ……」
守り神の証。先祖から連綿(れんめん)と伝えられた、私の唯一の血脈の証。
「持ってきたのね。故郷から…」
水杖も、その紅玉が意味するところをよく知っていた。
ふと、不安が胸をよぎる。
凌介様に、いつか、この紅玉をお見せする日が来るのだろうか。
私の……いや、お旗女(はため)すべてのともいえるある宿命について、語る日が来るのだろうか。
しかし、私は瞬時にその思いを打ち消した。今は、それを想う時ではない。

山上の月が、辺りをこうこうと照らす中、私と水杖は半年を過ごした社殿を後にした。
聖殿に糠(ぬか)づいた後、社殿奥の老師の居室に向かって拝礼する。老師の部屋には、まだ灯がともっていた。そこから無言で見送る目があることを、私も水杖も良く解っていた。
社殿の門を出る直前に、もう一度私たちは立ち止まった。この門をくぐれば、もう二度とここへは帰れない。しかしもうためらいはなかった。
行ってまいります。
別れの言葉の代わりに、決意をこめて。
深く頭を下げた私たちは、門の外へ、新しい運命に向かって、迷

わずその一歩を踏み出した。

凌介様との待ち合わせは、観滝社殿の東門のそばだった。天槻城には、真咲様と連れ立って帰ると言う。水杖と共に出発できるのは、とても心強い。月明かりの中に浮かび上がる幻想的な山々を眺めながら、私たちは何か荘厳な気持ちで、それぞれの主が来てくれるのを待っていた。

門から一人の武人が出てきたのは、その時だった。

後ろに、小柄な影を従えている。

私たちには、初めて見る顔だった。しかし今日、観滝社殿を訪れた四人の武将の一人であることは、容易に想像がつく。

「俺は足軽歩兵（あしがるほへい）第六番隊隊長、岩見（いわみ）　尽四郎（じんしろう）だ。お前ら、お旗女の女どもか？」

野卑な声で武将が名乗る。黒い鎧が近づいてくる。嫌な予感がした。

（2）

水杖（みなづえ）が、身構えるのが解った。

岩見尽四郎と名乗った黒鎧の武人は、わずか数歩で私たちの前に立ちはだかった。傲慢な腕を組み、舐めるような視線で見下ろしてくる。視線が私の上に止まる。

視線が私の上に止まる。私。水杖。そしてまた私。

月が雲に隠れ、また現れた。

月明かりに照らされた目の前の男は、かなりの巨漢だった。猪首の上に、つるりとした顔が乗っている。それはほとんど無表情だったが、瞳に浮かんだ陰惨な光と、肉厚の口元に浮かんだ寧猛な笑い

が、ある種の凄味を見せていた。私は思わず、半歩下がった。
「お前」
不意に太い指が、ぐっと私の胸元を指した。ぞくり、とその一点に寒気が走る。
「代われ、こいつと」
後方に顎をしゃくる。その時、初めて私は彼の巨体の影にもう一人、小柄な女性がいることに気がついた。
今日選ばれたお旗女のひとりだ。名前は、確か……
「早蕨(さわらび)？」
水杖が恐る恐る呼びかける。影は、びくり、と肩を震わせて、ますます小さくなった。
「この女は気に入らぬ。俺は美しい女が好みなのだ」
岩見が早蕨をにらみつけ、吠えるように言った。
「当てつけに、こ奴の細頸、締めてやろうかとも思うたが、替えの女が3人もいるのだ。むざむざ殺すも寝覚めが悪い」
「なん……ですって！」
水杖が鋭く叫んだ。
「命を何だと思っているの！？　私たちはモノじゃない！　それにお仕えする主も決まってる！　師の決められたことをないがしろにするの！？　いいえ、あなたのような嫌な男に、だれが従うものですか！　早蕨、逃げて！　社殿に戻り早く老師様に……！」
アアッ！　と悲鳴が上がった。いきなり丸太のような暴風が私のそばを通り抜けたと思った瞬間、すぐ横にいた水杖の小柄な体は、向こうの茂みに向かって思いきり吹っ飛ばされていた。
岩見が殴り飛ばしたのだ！　低木の茂みに叩きつけられた水杖は、ザザッと葉を撒(ま)き散らしながら地面に落ちた。あまりの出来ごとに、私は茫然とその光景を見つめた。しかしそれも一瞬のこと、大切な友達を傷つけられた怒りに、カアッと体中が熱くなる。不意に後ろで気配が動いた。振り向いた私は目を疑った。縮こまっていた早蕨が、大きく首をのばしている。そのばさりと垂らした前髪の下には、

信じられない表情が浮かんでいた。

彼女は、呻く水杖を眺めながら、声を立てずに笑っていた。

その瞬間、私の中で何かがはじけ飛んだ。

「よくも水杖を！」

体の底から声が出る。

にやついていた岩見の巨体が、びくっ、と止まる。異形のものを見るように、私の上に視線を這わせる。

ドクン！

胸がいきなり熱くなった。袂（たもと）に隠した紅玉が、私の鼓動に合わせて鳴動する。

いけない！　心を失ってはいけない……！

私の中で何かが叫んでいる。しかし、旅立ちの門出でいきなり晒（さら）された暴虐に、私は逆上する自分を止めることができなかった。

紅玉が、あざ笑うかのように発光する。

岩見が、ぎょっとしたように目を見開いた。私は真っ向からその視線を受け止め、跳ね返した。視界が金色に染まる。今、私の目はきっと輝いている。まるで深山を徘徊する伝説の獣のように。体にすさまじい力があふれ始めた。強い力に引かれるように背筋が伸びる。岩見の表情が凍りついた。信じられぬ！　とでも言いたげに、その目があわただしくまたたかれる。

「朝芽！　止めてーーーっ！！」

その瞬間、水杖が絶叫した。

その声は灼熱（しゃくねつ）の脳裏に氷の刃のように突き刺さった。ハッと我に返る。途端に、せり上がって来ていたすべての力が、流れ出す汗のように霧消していくのが解った。

岩見が目をぱちつかせた。時間にすれば、わずか数秒の出来事で

ある。今見た光景は、おそらく、なにかの錯覚と思ったのだろう。
「貴様あぁぁあ！」
ごつい腕が私をつかんだ。両腕が万力のような力で締め上げられる。
足が宙に浮いた。
岩見は私を、つかんだ腕ごと宙に持ち上げ、ぶんぶん揺さぶった。ぐらり、と天地が揺れる。すさまじい力だ。
「ゆすり殺してやる！」
狼狽（ろうばい）しかけた自分を糊塗（ごと）するように、岩見は私を振り回し続けた。月が乱れ飛ぶ。ぐらり、ぐらりとゆがむ視界。
「いい気味」
早蕨の、冷たい声がした。私は半分気を失っていた。聞き慣れた声がしなければ、そのまま暗黒の淵に沈んでいったことだろう……。
「お前！」
突然鋭い叫びと共に、ひゅんっと空気が動いた。途端に両腕が解放されて、私は地面に放り出された。
巨漢の黒い鎧が、勢いよく宙に浮くのが、涙でにじんだ視界にちらりと映る。
どぉおん！
地響きを立てて岩見が落下した時、私の体は力強い両腕に抱き起こされていた。

「朝芽！　おい朝芽！　しっかりしろ！」
ふらつく頭を振って目を開ける。ぽっかりと空いた視界に、必死に覗き込んでいる凌介様の白い顔。
ああ、来てくださったんだ……
「岩見……てめぇ、なにしやがんだ！　こんなことされて黙ってられると思うのか！」
凄味を含んだ低い声で、凌介様は前方の闇をにらみつけた。その

先に、ゆらりと立ちあがる岩見の具足姿。
「売られたケンカは買うぜ。こいつの代わりにな。」
気だるげな別の声が聞こえた。痛む首を曲げると、そこには水杖の主……真咲様が、岩見の背後を突く形で立っていた。薄笑いを浮かべていたが、その体からはすさまじい闘気が立ち上っている。彼の足元には、水杖が突っ伏していた。
若侍二人に囲まれた岩見尽四郎は、何も言わずに踵を返した。腰を低く落として身構える凌介様の横を、わざとかすめるように通り過ぎると、上目づかいに様子を見ていたお旗女の早蕨を小突いて、闇の中に消えていった。

「なんてこった」
凌介様がふうっと息を吐いて肩を落とす。真咲様はぶぜんとした表情で、派手な肩布を裂き、腰筒の清水で濡らしている。二人は待ち合わせに遅れたわけではなかった。ご領主様のこまごました用事を老師様に伝えている間に、あの妖人がたまたま私たちに目を付けたらしい。
「しかし俺ぁ一瞬、ついに倒したかと思ったぜ。あの蹴りはすさまじかったな」
真咲様が無理やり明るい声を上げる。
「その方が、長浜のお為だったかもな。」
凌介様が陰気につぶやいた。
目の前で、水杖がしゃくりあげている。私はぎゅっとその手をにぎりしめてうつむいていた。つい先ほどの光景が、何度もよみがえり、思わず唇をかみしめる。凌介様はそんな私をいたわるような目で見ていたけれど、おそらく私の本当の怯えには、気づいていなかっただろう。
あの時、水杖が叫ばなかったら。

私は、取り返しのつかないことをしていたかもしれない。

「朝芽」

水杖の小さな声がした。ハッと手をにぎりしめる。

目の前に、親友の笑顔があった。まだ涙にぬれた頬。その口が小さく動く。

（大丈夫。誰も気づいてなかったよ）

私はギュッと目をつぶった。涙がこみ上げてくる。もうどうしようもなくあふれてくる。その時肩に手がおかれた。そして、凌介様の低い声が、優しく話しかけてきた。

「泣くなよ。もう忘れようぜ」

思わず見上げると、涼やかな瞳がじっと私を見つめてきた。

「武人の世界は、楽園じゃない。これからは、もっと非道（ひど）いことだってある。それでも俺たちは、進まなくちゃね。あんな小人に、いちいち構ってられるかって。」

私はうつむき、ぐっと涙をのみ込んだ。温かく広い掌が、ギュッと私の両肩をにぎりしめた。

「俺の部下は、俺が守る」

幸い水杖にけがはなく、泣きたいだけ泣くと、恥ずかしそうに腫れた目元を隠していた。最もその袖口は、すぐ真咲様の手で荒々しく引きはがされ、冷たく絞った先の肩布で強引に冷やされていた。本当は優しい方なんだ……と、衝撃の連続の中、ほっと嬉しくなったことを覚えている。

暴風は去った。私たちの心に深い爪痕を残して。

闇に消える寸前の早蕨の顔を、私は忘れることができなかった。

赤く光る目。憎悪にゆがんだ顔。あれは本当に、私と同じお旗女の見せた表情だったのか。

「まさか門出に“長浜の凶星（きょうせい）”に出くわすとはな。社殿では大人し

くしていやがった癖によ。あいつは辺境勤めだから、当面、あのツラは見ねぇで済むってのが救いだぜ。あれで城代家老の縁戚ってんだから、始末がわりぃや。どんだけ凶行を犯しても、すぐに誰かがもみ消しやがる。……しかし老師様のお庭先で、まさかお旗女に手を出すとはな。」

しゃがみこんで、水杖の頬を冷やしていた真咲様が、吐き出すように言った。その言葉で、なぜ、あのような侍が、軍律厳しい長浜軍にいられるのかも、解ったような気がした。

「あいつは獣だ。人の道理が通じねぇ。お前ら、今度見かけたらすぐに逃げろよ。」

真咲様が水杖に言い聞かせている。凌介様は無言で、馬の鞍に荷をつけていた。

「なあに、あいつの正体は臆病者さ。弱い者いじめしかしやがらねえ。戦場で会えば真っ先に狙い撃ちだぜ。それを器用に逃げ回りやがる。あいつは長浜の侍全員を敵視してやがるから、それは、つまりみんながあいつの敵ってことで……、あーっくそっ、やつは説明まで混乱させやがる！　つまり、奴には、近づくな！！」

しゃべっている内に訳が解らなくなってきたらしい真咲様が、腕を振り回しながら喚く。水杖が吹き出す。続いて私も思わずクスッと声を漏らした。

つられたように振り向いた凌介様からも笑顔がこぼれる。

明るい笑い声が辺りにはじけた。暗い思いが、見る間に洗い流されていく。

「なんだよ、お前ら。おれは心配してだなぁ！」

真咲様だけが腕を組み、口を尖らせてみんなを見回していた。

月が照る山道を、私たちは二頭の馬に分かれて走った。

「よっしゃ！　競走だ凌介！　先に天槻に乗りつけた方が酒樽一つおごるんだぜ！」

水杖を鞍前に載せた真咲様が、ヒャッホウ！と奇声を上げて手綱をさばく。見る間にその姿が小さくなっていく。
「はは、アイツ、勝てもしねぇってのに、毎回よくやるよ！」
明るく言い捨てた凌介様は、いきなり馬首をめぐらした。
「近道行くぜ！　そらっ」
馬が飛ぶように崖道を下り始める。私は鐙にしっかりとつかまりながら、吹きさす強風に逆らって叫んだ。
「なんだってっ！？」
ともすればつんのめりそうになる力に必死で抗いながら、凌介様が叫び返す。
「私、あなたにお仕え出来て良かったです！」
今度の声は、きちんと聞こえたかどうか……。
月明かりを一身に浴びながら、険峻（けんしゅん）な崖を見事に下りきった馬は、一路、天槻（あまつき）城目指して暗い山道を疾駆していった。

〈続く〉

第三章　お書物庫騒動・前編

（1）

観滝社殿の一修練女であった私が、長柄足軽一番隊隊長・出石凌介様のお旗女として天槻城に入城してから、十日が過ぎた。

正直、この間のことはほとんど記憶に残っていない。あまりに早く時が流れすぎたので、振り返る暇も、感じたことをゆっくりと心に刻みつける暇もなかったのだ。ただ、怒涛のように始まったご奉公初日のことだけは、かろうじて思いだせる。

天槻城に到着したのは、十日前の明け方だった。観滝社殿を含む国内でも有数の険しい山々はすでに後塵の彼方に隠れ、これだけは変わらぬ春の月が、初めて目にする西の平野に優しく傾いていたのを覚えている。

東の空が明るくなり、野に朝霧が立ちこめる中、小高い丘の上に未だ黒い影となって佇む天槻城は、とても幻想的に見えた。

しかし、その感慨にふけっている暇はなかった。

着到と同時に凌介様は、まだ静かな足軽長屋の一角の小さな角部屋に私を連れて行った。

「ここが朝芽の控え部屋だ。最初はちょっとうるさいが、なあに、すぐ慣れるさ。」

私物を入れるつづらに小さな文机。壁にはお茶室のような違い棚。塵ひとつなく掃き清められた板張りの床。朝の静謐な空気の中、それはこの上なく素晴らしい居室に思えた。押入れには、寝具まで入っている。

「俺は城下に家がある。朝芽も借りたいなら手配はするが……」

「いいえ。ここで住まわせていただきます。」

「そうか。」
目を輝かせた私を見て、凌介様が頷く。
「では俺は行くよ。朝飯前にひと訓練あってね。」
「私も参ります」
あわてて腰を上げた私を、凌介様は軽く押しとどめた。
「いいから、ゆっくりしてなよ。今にイヤってほど、動くことになるからさ」

凌介様の言葉は本当だった。
朝餉(あさげ)が済むと、それまでゆったりとしていた時の流れがいきなり激流へと変わったのだ。
めまぐるしく私の名を呼ぶ声、次々に出される指示書。それはほとんどが新参のお旗女に対して城内の家臣から与えられるものだったが、おかげて私は休む間もなく、板鐘(ばんしょう)が昼を告げる頃には城内の殆どの場所を覚え、夕刻には日常使う物の位置をすべて頭に叩き込み、翌朝には実務に入っていた。

凌介様は真咲様と共に、早朝から深更(しんこう)まで長柄部隊の調練や城下見回り、遠駆けに城内雑務と文字通り飛び回っていた。私は親友の水杖(みなづえ)と言葉を交わす暇もなく、朝に主が水浴びをすれば、着替えと櫛盥(くしだらい)を持って駆けつけ、昼に書簡をしたためるときは、傍らに居て墨を磨(す)った。夕刻ともなれば灯明油(とうみょうあぶら)を数多ある詰所の行燈(あんどん)に注いでまわり、夜には口頭で受ける明日の調練科目を回覧書に朱書した。
この辺りの流れは、観滝社殿ですでに実習済みだったので、めまぐるしい予定ではあったものの、さほど混乱は感じなかった。
しかし、驚いたのは凌介様の素早さだった。
すべての動作が速いのだ。
かつてあの深山の泉で、崖を登る早さにも驚いたものだったが、それはここでも如何なく発揮されていた。
動きに無駄がないのだろうか。同じ仕事をこなす真咲(まさき)様の、軽く

二倍は動いている。
最も真咲様は、手と同様、口の方もかなり動かしていらしたのだが……。

水杖の姿も頻繁に見かけた。部屋は一緒ではなかったが、彼女も同じ長屋の一角に自分の居室を与えられているはずだった。
彼女も順調に仕事をこなしているようだった。目が合うと、真咲様の方を向いてちょっと肩をすくめ、それから嬉しそうに仕事に戻っていった。

そして、ようやくお旗女の新生活にも慣れてきた十一日目の朝。
私は、天槻城でのある騒動に巻き込まれることになる。

お旗女の重要な、そして特殊な仕事に、漢文の読み書きがある。観滝社殿での見習い時代にも、この読み書きの修練はことのほか厳しかった。
当時、長浜の女性たちは平仮名を使っていた。しかし、お旗女の仕事の内には、隊長の側近として、いち早い地図の準備や出陣先の風土の把握があった。必要な情報は、書籍を紐解(ひも)けばいくらでも調べることができたが、その主文のほとんどが漢文で書かれていたのだ。
忙しい主に代わって、上役の方々との書簡のやり取りも仕らねばならなかった。その際には流麗な返書を書くことはもちろん、時には特殊な戦用語(いくさ)や、忍びが使う暗号文の解読も求められたので、私たちは常に辞書や先史と首っ引きだった。

私は元々、本を読むことがとても好きだった。
見習いの頃も、よく観滝社殿(みたきしやでん)のお文庫所(ぶんこしよ)に入り浸り、頭の中だけは厳(いか)ついのうと、よくお師様に笑われたものだ。

天槻城のお書物庫は、本丸から南東に突き出した二の丸の三階にあった。この城では文武奨励の気風が強く、一般兵や、城内勤めの小者まで、男女を問わず自由にご本を読むことができた。番役に申し出れば、借りることもできる。

その日、私はまたお書物庫にやってきていた。ここでは二人の番役が、交代で詰めている。

「やあ、朝芽どの」

扉の前で、ふわりと立っていた白髭の老人が、私を見てにこにこと話しかけてきた。もうすっかり顔なじみになった、お書物庫番役の老歩兵である。名前は確か、月江様と言った。もう一人は目つきの鋭い若い兵士で、今は非番か、姿が見えない。

「いつもお邪魔いたします」

老人が、鍵を開けてくれた。中に入ると、何十年分もの歴史と埃の、独特な、しかしどこか懐かしいにおいがどっと押し寄せてくる。

「出石殿から聞いておるよ。長浜軍略伝と……それから常梓抄」

「ありがとうございます」

月江老が出してくれた分厚い書物を受け取る。その上にポン、と固く巻かれた小さな包みが乗った。

「ばばが作った団子じゃよ。うちでお食べ」

わあ、と私は目を輝かせた。月江夫人の作るよもぎ団子は絶品で、初めて食べた時はこの世にこんなおいしいものがあるのかと、思わず一人ため息をついた。感動を伝えると、月江様はその後もちょくちょく持ってきて下さった。

「ありがとうございます」

思わず胸に抱くようにすると、月江様は目を細めて笑った。勤めはじめてまだ新参の身ではあるけれど、こういった温かさに触れるたび、ここへ来てよかったと改めて思わされる。

お礼を述べて、部屋を出ようとした時、ふと一冊の薄い本が目にとまった。
表には、
長浜辺境外史
とある。重厚な墨跡が瑞々しい。
最近書かれたものかしら？
心を惹かれて手に取って見る。中を開いた私の目に、見開きいっぱいに描かれた絵図面と、
『長浜郡杵築村五郷全図』
の太い文字が飛び込んできた。
杵築村五郷。
その名を忘れることは出来ない。
私の、故郷。
半年前、水杖と共に殆ど追われるようにして捨ててきた、私の生まれ育った村。
あの山も、この川も、すべてが美しい筆致で思い出の中の景色そのままに描かれていた。
釘づけになった目から、熱いものがあふれ出す。
あわてて袖で拭う。顔を上げると、月江老の穏やかな笑顔があった。
「気に入ったなら、持って行きなされ」
「よろしいのですか」
思わず声が弾んだ。私は、いただいたお団子の包みと共に、そっとその本を胸に抱きしめた。

「朝芽ーっ！」
暗いお書物庫から、春の明るい光の中に出た私は、覚えのある声にパッと振り向いた。
「水杖！」

懐かしい姿が、大きく手を振りながら駆け寄ってくる。
観滝社殿の東門で別れて以来、時折目を合わせる以外、殆ど会うことのかなわなかった親友。どれだけ話がしたかったことか。
「元気そうね！　よかった！」
駆け寄ってきた水杖は、飛びつくようにして私の両手を握りしめた。
私も、ギュッとその手をつかむ。
「真咲様は？」
「ご城主さまのお供でご視察よ。今日はお旗女はお呼びじゃないんですって。」
可愛く膨れた水杖は、不意にいたずらっぽい笑みを浮かべた。
「出石様も出て行かれたわ。お二方から命令です。戻るまで、お旗女同士、心ゆくまで情報交換していろと！」
顔を見合わせた私たちは、同時に吹き出した。弾けるように笑いながら、私たちを気遣ってくれた主二人の優しさに、ギュッと胸が熱くなる。
「行きましょう！　話したいことがたくさんあるのよ！」
水杖が袖を引っ張る。私は月江老からいただいた包みを目の前に掲げ、にっこりと笑って見せた。

日当たりのいい調練所裏手の壁にもたれ、月江夫人自慢のよもぎ団子に舌鼓を打ちながら、私たちのおしゃべりは尽きる処を知らなかった。
「……そこでお使者様が金切り声をあげてね！」
私と比べて積極的な水杖は、城内のうわさにもよく通じていた。まったく、同じ十日間を過ごしたとは思えないほど、彼女の情報は豊富だった。
私もありったけの出来事を話した。この数日間の楽しかったこと、辛かった出来ごと。
与えられた小部屋の話になった時、水杖がちょっと不満げに言っ

た。

「実はね、私、はじめはご城下で暮らしたいと申し出たのよ。影芳（かげよし）様のお屋敷の女中部屋にでも置いて下さいとお願いしたの。屋敷内に居れば、いつでもお支度に伺えるでしょう。お腰の物や、お具足の手入れなど、やるべき務めは沢山あると思って。……でもね、」

真咲様は、即座にそれを却下したと言う。

それは、奥方の仕事だ、と。

「なんかグッサリきちゃったわ～。勿論、私たちは奥方ではないし、そのような高望みをするつもりもないけれど、ああまでハッキリ言われると、なんだか……」

真咲様も凌介様も、まだ独り身だ。おそらく、真咲様は深い意味があって言われたのではないだろう。お旗女の仕事に明確な規定は無いが、おそらく真咲家では、そこに一つの厳格な線が引かれているのだろう。

しかし、水杖の複雑な気持ちは痛いほどわかった。私もまた、おそらく彼女と同じ衝撃を、その言葉から受け取ったからだ。

それは、奥方の仕事だ。

凌介様も、同じように言われるのだろうか。

あの時凌介様は、城下に住むか？　と聞いてくれた。しかしそれは、あくまでお屋敷の近くにという意味であり、やはりお旗女を自らの住居に上げることは無いように思えた。それは今まで信じ切っていた何かにさっと影が差したような気分だった。思いが顔に出ていたのだろう。水杖があわててごめんね、と言った。

「ごめん朝芽、変なこと言ったね。私は十分満足してるわよ。真咲

様にお仕え出来て、とても幸せよ。」
「ううん、いいの。水杖ががっかりするのも当り前よ。」
水杖は、真咲様を好きになりかけているのかもしれない、とふと思った。
では、私の今のこの気持ちは、どう言い表せばいいのだろう……。
「これを見て。」
群雲のように沸き起こる思いを振り払うように、私は先ほどお書物庫で見つけた『辺境外史』を取りだした。
杵築(きつき)村五郷の絵図を開く。鮮やかな色彩が頁からこぼれおちる。
水杖がわあ、と懐かしむ笑みを見せた。
「素敵に描かれているじゃない。」
「うん。実際、素敵な村なんだから」
辛かったはずの思い出に微笑むことができるのは、今がきっと満ち足りているから……。
「いつか、また行けるといいわね」
「うん」
私は心からそう言った。

「お書物庫と言えばね」
ふと、日が陰ったようだった。
水杖の声音がすこし、落ちたのだ。
「どうも、荒らされているようなのよ。数日前から」
「荒らされている……？」
「私も詳しくは解らないんだけど、なんどか書棚が掻きまわされ、いくつかの書籍が消えているんですって。」
「まあ、誰がそんな……」
「それが全然わからないのよ。夜の間なのは確実なんだけど、誰も気付かないうちにお書物庫だけがやられているんですって」
「それで、盗まれた書物は？」

「それがね」
言葉を切った水杖は、私の手元にふと視線を向けて、
「地図の本ばかりなんですって」
「地図の……？」
私は思わず、手にしていた『辺境外史』に目をやった。
「あら、その本は違うわよね。外史っていうんだから、歴史とか伝承とか……そういった事が書かれているはずよ。第一、盗まれずに残っているわけだし」
水杖があわてて言葉をつなぐ。私はいいのよ、と笑って
「でも、お書物庫のお番役さまは、何もおっしゃっていなかったわ」
「それはそうよ。公にはできないことだもの。ここの御城主も、長浜の本城には内密にしているみたいよ。大体、今日のご視察も、それと関わりがあるとかないとか……」
水杖がそこまで言った時だった。不意に二の丸の方でけたたましく板鐘が鳴りだしたかと思うと、
「大変だ！　お書物庫がやられたぞぉッ！」
「火事だ！　ボヤが出てるッ！　早く消し止めろ！」
「急げ！　火元はお書物庫、お書物庫だぁッ！」
のどかな春の空気を引き裂くように、次々とひきつった叫び声が上がった。
建物から沸き出すようにして、城兵たちがあふれ出てくる。その姿は次々と、二の丸目がけて駆け出していく。
お書物庫！
「月江様……！」
私は顔色を変えて立ち上がった。ばっと駆けだす。水杖があわてて背後で叫ぶ声が聞こえた。

（2）

押し寄せる天槻兵や、留守居の家臣の集団に揉まれるようにして走り、二の丸の狭い階段を殆どよつばいになって私は這い上がった。現場では、すでに大きな人の輪が出来ていた。

「月江様！」

思わず叫ぶ。人の輪の中に、がっくりと腰を落とす白髪頭が見えた。もう一度叫ぶと、のろのろと、その顔が上がった。

「朝芽どのか…」

人垣が割れて、駆け寄った私を通してくれた。私は周囲に礼を述べつつ、小柄な老人の元に走り寄った。

「月江様、お怪我は！」

「わしは何ともないよ……だが、お書物庫がこのざまじゃ。御城主様に何と申し開きできよう」

老兵の指さす方を見て私は息をのんだ。

水浸しの、黒く焼け焦げたお廊下の板木。そしてめちゃくちゃにたたき壊されたお書物庫の扉。

見るまでもなく、中の惨状は容易に想像がつく。

「ごっそりやられたよ。地理と名のつく書物は全部じゃ。まったく、非道（ひど）いことをする！　どこまで損ねれば気が済むんじゃ…」

月江老は、情けなさそうにぼやき続けた。

お書物庫のボヤは、結局廊下の一部を焼いただけで済んだようだ。幸か不幸か、番役二人の交代時で、書物庫の前は一時無人になっていたと言う。月江（つきえ）老はかなりしょげていたが、何事もなかったのは幸いと、私は胸をなでおろしたのだった。

天槻（あまつき）のお書物庫は、普段から開放的だったこともあり、やがて帰城したご城主様により、失われた書籍については、番役二人にお咎めなしとの裁可が、即日下った。

しかし、曲者の侵入をやすやすと許した事態を重く見た重臣たちは、宿直（とのい）番を増やし、翌終日かけて修繕されたお書物庫の警備も、

あわせて厳重に行うことになった。月江老も、お役を外されることはなく、我こそ曲者を仕留めんと、より精勤に励んでいるようだ。

ボヤ騒ぎから三日ほどたったある夜、凌介様にも宿直のお役が回ってきた。下城の鐘が鳴った後、改めて夜のお勤めが始まる。この日は私も、寝ずの番を心得て、凌介様と共に本丸の詰所に控えていた。

詰所は部屋の隅々にまで燭台がともり、昼間のように明るかった。外掘や内庭、泉水の中にまでかがり火が焚かれ、厳めしい鎧に身を固めた歩哨が直立している。ぱちぱちと松明のはぜる音が、詰所の奥にまで聞こえてくる。まるで戦時のように、天槻城はその全貌を赤々と、闇の中に浮かび上がらせていた。

凌介様は、同じ宿直の隊長たちとしばらく明日の修練について談笑していた。途中で真咲様が酒樽一つを抱えて登場し、謹厳な寝ずの番がささやかな酒宴と化した。やがて夜も更け、彼らが手枕でごろりと畳に転がり出すと、凌介様は黙って立ちあがり、私の方に戻ってきた。

「朝芽、遅くまでつき合わせちまったな。俺が起きているから、少し休めよ」

私のすぐ側にしゃがみこみ、凌介様は低い声でいたわるように言った。

「大丈夫です、お気づかいくださいませんよう」

私は眠っている人たちを起こさないよう、小声で答えた。向こうでは、真咲様が、派手な薄衣をかぶって大の字になっているのが見える。　殆どの人々が横になってはいたが、お役目を意識してか、深くは眠っていないようだ。誰かが起きていれば、問題はないのだろう。

凌介様がふと、膝の上に手を伸ばす。そこには、今まで読んでいた本が乗っていた。

「辺境外史……か。」
「ご存知でしたか」
尋ねると、黒々とした瞳が笑みを含んで私を見た。思わず頬が赤くなり、ちょっと目を伏せる。
「昔、な。国境の城に真咲といた頃だ。……ん？　この絵図は……」
手を止めたのは、杵築村（きつきむら）全図の頁だった。どきん、と心臓が一つ鳴る。
凌介様はしばらくその見開きを見つめていたが、
「もう忘れたな。ずいぶん前の話だ」
不意に本から手を離した。
軽快に立ち上がる。見上げた顔の前に、大きな掌が差しだされた。
「少し歩くか。夜の天守閣なんて、中々上がれないしさ」
凌介様は、そのまま私の手をつかみ、返事も待たずに引き起こすと、
「影、起きとけ。俺は見回りに行く」
容赦なく、友人の寝姿を蹴っ飛ばした。

それは文字通りの見回りで、凌介様は本丸中の溜間や詰所、お廊下を回り、更には庭園や周囲のやぐらにまで足を伸ばした。私もそれに従って、消えた燭台に火をともしたり、明かりの届かない闇の中に、目を凝らしたり、とあわただしく動き回った。
どれくらい部屋を回っただろうか。気がつくと私は、お城のかなり高いところにまで上がって来ていた。目の前には、天守に続く木段が見える。本丸の最上階。旗女がそのような高みに上がるのは、と私は一瞬尻込みしたが、凌介様は、心配ないと言ってずんずん階段を上ってしまった。ご城主様は普段は本丸の裏手のお屋敷内におられるため、天守には子（ね）の刻を過ぎた深更に限り、“怪異を払う”という名目で、宿直の者も上がることを許されているそうだ。勿体ない事ではあったが、主にお咎（とが）めがないのであれば、と私もそっと階段に足を乗せた。

生まれて初めて上がった本丸の天守は、四方に窓が開き、夜風が穏やかに吹きこんでいた。家具調度の類は一つもなく、ただのがらんとした溜場に見える。燭台は吹き込む風で消されていたが、外からの明かりで、辺りの様子はよく解った。

窓の向こうに夜空が見える。惹かれるように大窓から外へと踏み出した私は、思わず感嘆の声を上げた。

「わあ……綺麗」

頭上は満天の星空だった。はるか下方には御城下の明かりがぽつぽつとみられ、その先には暗い平野が広がっていた。平野の彼方には、山々が夜の闇よりも深く沈んで連なっている。月はとっくに西の山に沈み、空を渡るホトトギスが、時折鋭い声を上げる。山から吹く風は生温かく、どこか初夏のにおいもはらんでいた。

眼下には、渡り廊下の屋根が東西に続き、その先には、二の丸の大屋根が見えた。つづらに折れた複雑な通し道。随所に門が設けられ、まるで巨大な迷路のよう。少し目線を上げれば、三の丸とその外郭が、本丸の敷地を広く取り囲んでいるのが良く解る。とは言え、天槻城は、それほど大きな城ではない。戦略的には、長浜本城の、それこそ二の丸のような位置に当たる。　便宜上本丸、二の丸と呼び分けてはいるが、上から見れば、それらの屋根はすべて間近に連なっている。

私はしばし無言で、これらの景色に見入っていた。様々な思いが胸をよぎる。半月ほど前までは奥山の泉に通っていたのに、それがもう遥か昔のように思い返されるのが不思議だった。

すっと、私の横に人影が立った。

振り向くと、すぐ傍らに凌介様が立っている。

驚いて脇へ退こうとすると、「やめろよ」と笑いながら制された。そのまま並んで立ち、無言で同じ景色を眺める。緊張と、高ぶる気持がないまぜになり、私の胸は鳴りっぱなしだった。

改めて間近で見た凌介様は、私よりかなり上背があった。真咲様が大柄なので、そのそばにいると小さく見えていたのだが、実際は、引き締まった厚い胸板にがっしりとした肩幅の、すらりとたくましい長身だった。

大きな掌。長く美しい指。その手を無造作に欄干に掛け、凌介様はまっすぐ前方の闇を見ていた。整った横顔に、栗色の髪が影を落とす。高い鼻梁。わずかに伏せられた長い睫毛。闇の中にうかんだ白い顔は、何か物思いにふけっている美しい彫像のようだった。

きれい……

おもわず見とれた私の脳裏に、ふと、先日の水杖の言葉がよみがえった。

“奥方になれるなんて、おもうはずもないけれど”

いきなり、高鳴っていた胸を冷たい手でぎゅっとつかまれた気がした。

こんなときに、なんでそんなことを思い出すの、と自分が恨めしくなったが、一度浮かんだ思いはたやすく消えてくれない。

“それは、奥方の仕事だ”

解ってはいた。どれだけ目をかけてもらえても、お旗女にはどうしても超えられない壁があると言うことは。

夜闇は人の心を怪しくかき乱す。

解ってはいるけれど。

どうして、こんなに胸が痛いのだろう。

「……この十日間。」

澱んだ思考を打ち払うように、ふいに真横で、声がした。私は、はじかれたように顔を上げた。まるで心を見透かされたような気がして、途端に頬が熱くなる。しかし、そんなことがあるはずもなく、

凌介様は前を見たまま、いつも通りの、静かな声で後を続けた。
「期待以上だった。正直、音を上げるかと思ってたんだ。試していたわけじゃないけど、思ってた以上の働きだった」
その言葉は何よりも嬉しく私の心に染み渡った。ここ数日の思いがどっと胸によみがえり、私はあわてて下を向いた。先ほどまでの心の痛みが、見る間に消え去っていく。そうだわ。どうしてあんな余分なことを考えたのかしら。
「凌介様が、教えて下さったおかげです」
うつむいたまま、小さく答える。
「朝芽」
不意に、名を呼ばれた。恐る恐る顔を上げると、凌介様がこちらを向いていた。長い指がすっと伸びて、私の頬に触れる。
「また泣いてるって」
「泣いて……いません！」
あわてて顔をそむける。心臓が大きく跳ね上がる。
「いいさ。泣いても笑っても、お前は一人前のお旗女だ」
凌介様は明るく言って、欄干に背を持たせかけ、夜空を振り仰いだ。
私はこぼれそうになる涙を、袖口で拭った。
目元に温かい指の感触が、いつまでも残っていた。

東の空が明るみ始めた。はじめは星の輝きに紛れていたが、はるか遠くの山上の空が、次第に夜の闇を押しのけ始める。
「そろそろ行こうか。」
凌介様が、欄干から体を離したその時……
空気の中に何か違和感を感じて、私は立ち止まった。
まだ闇が澱む二の丸の大屋根の上。お書物庫の出窓の近くに、何か黒いものが動いたのだ。
「朝芽、どうした」

「あそこに、なにか……」
凌介様の反応は早かった。手摺の上に身を乗り出し、私が指す方向にぐっと目を凝らす。不意に
「人影が二つ。お書物庫の上」
呟くと彼はパッと欄干から飛び降りた。
「お前は詰所へ！」
言い捨てるや、燕のように身をひるがえすと、すさまじい速さで天守から走り出ていく。
あわてて続こうとした時、視界の隅に光が走った。思わず振り向く。
彼方の屋根の上で、影の一つが手にした明かりをきらきらと振っていた。確かに、黒装束の男が二人見える。それにこたえて、城の西方の山の中腹に、小さく合図の火が点った。二つ、三つ。くるくると回る。そしてすぐに消えた。それはどこか幻想的な光景だった。思わず私は、見とれていた。
城中が騒然となったのは、その直後のことだった。

「曲者！」
「出たぞ！　盗人だ！」
喚き声が城のあちこちからあふれだす。バタバタと侍たちが渡り廊下を走っていく。
内庭でも、見る間にお書物庫目がけて足軽兵たちが押し寄せてきた。矢がパラパラと射かけられる。屋根の上の影の一つが、もんどりうって転がり落ち、私は思わず息をのんだ。
残された影が、素早く屋根を回って視界から消える。仲間を助ける気はなさそうだ。
屋根から落ちた曲者に、兵士たちが重なるように組みつき、取り押さえたのが解った。

〈続く〉

（3）

曲者の正体は、最近、国内を荒らしていた大きな山賊の一味だと解った。首領に命じられて天槻城（あまつきじょう）から、地理に関した本を持ち出していたらしい。

「目的は解らねぇ。ただ、辺境の地図が要るんだと言われ、それらしいのを片っ端から盗んだだけだ。」

捕えられた男は、それ以上のことは知らなかった。首領の顔さえも解らないと言う。

逃げたもう一人の男についても、

「初めて組んだが、同じ山賊の下っ端だと思う。殆ど言葉も交わさなかった」

と冷めた口調で吐いたそうだ。

結局、あれだけ労を費やしたにもかかわらず、目的の本は得られなかったらしい。命令が、“地理の本”だけでは、無理もない。

山賊の首領は、渕上幻奇（ふちがみげんき）と名乗る極悪非道の妖漢で、隣国の息のかかった大忍者とも、千年も生きる妖術使いだともいわれている。根拠のない噂ではあったが、それはこの男の不気味な肖像として、今も巷に語られていた。

盗人はすぐに、長浜本城に送られることになった。根城や目的、その規模など、聞きたいことが山のようにあるのだという。

曲者の正体や目的が明らかになったことで、この件はひとまずの落着を見せた。山賊が何のために地図を欲しがるのかは解らなかったが、それまでお城を覆っていた得体の知れない暗雲が、少しだけ晴れたのは明らかだった。

凌介様と真咲様は、引き続き中庭警護を命じられ、調練の合間によく本丸を駆けまわっていたが、その後怪しい影の報告もなく、日々は穏やかに三日が過ぎた。

三日後、私は読み終えた辺境外史を携えて、再びお書物庫を訪れた。真新しい扉の前で月江老が迎えてくれた。

「やあ、来たね。」

「長い間お借りしまして」

「山賊が忍んでいたんじゃと？　まったく、こんなボロ書庫にどんなお宝が眠っていたのやら」

首を振りながら、月江老が鍵を開けてくれる。

いつものように中に入り、私は“辺境外史”を棚に戻した。

ふと窓の外を見ると、凌介様がちょうど中庭で長柄隊を調練しているのが見えた。よく通る大声がここまで聞こえる。眼下の動きは一糸も乱れず、軍列が向きを変えるたびに、槍の穂先がきらきらと輝く。反対側では、真咲様が指揮をしている。水杖の姿は、今は見えない。

「どうしたんじゃ」

月江老の声に、我に返った私は、あわてて窓から離れた。

「えらく深刻な顔をして見ておったぞ」

窓辺に立った月江老は、汗だくになって指揮している凌介様の姿を目にとめたようだ。その目が、ふうむ？　と言うように私に戻る。頬が熱くなるのが解った。

「良い若武者ぶりではないか」

「いえ、私は…」

心臓が高鳴る。見られてしまった！　あまりの恥ずかしさに、その場から駆け出したい衝動に駆られる。

「違うのか？　朝芽殿の視線の先は、すぐ解ったがな」

「私は……」

逃げることもかなわず、真っ赤になってうつむく。今にも消えそうになる声を、ようやく絞り出した。
「私は、お旗女でございます」
「それがなんじゃ」
月江老の声は、一抹(いちまつ)の厳しさを帯びていた。打たれたように私は顔を上げた。
「己(おのれ)の分はわきまえております。私はどうあっても」
奥方にはなれません！　寸前で、最後の言葉を飲み込む。動揺が走る。
私は何を言おうとしたの！？　なぜ、こんなことを考えるの！
「絆の深さに、身分の区別は必要か」
灼熱(しゃくねつ)の鉄を打ちこまれたように、私の心に衝撃が走った。思わず目の前を見つめると、そこには、常と変わらぬ風体の月江老が立っていた。しかしその視線は、射抜くように厳しく、私を見つめていた。
部屋の空気がピン！と張り詰める。
沈黙……。
しかし、その沈黙は、私の心を大きく包み込んでいた。
絆の深さに、身分はない。
そう。
心をこめてお仕えすることが、私の決意ではなかったか。
『俺の部下は、俺が守る』
ならば私は、日々の勤めでそれに答えねばならぬのではないか。
ただ一心に責務を果たすと決めた気持ちを、立場付ける必要なんてない。
垂れこめていた暗雲が、一度に晴れ渡ったような…。
どうして、こんな簡単なことに気付かなかったのだろう。
「朝芽(あさめ)どの」
やがて、月江老の優しい声が聞こえた。
「苦しまずとも良い。唯(ただ)、己の心に正直であれ。」

さすれば、道は開く。
最後の言葉は、風がささやいたようだった。聞き返す間もなく、月江老の姿が、扉の向こうへと去っていくのが見えた。空耳だったのかも知れない。しかしその声は、不思議な威厳と共にいつまでも、私の心に響いていた。

月江老がお廊下へと戻って言った後も、私は書棚の影で一人、立ち尽くしていた。
自分が採るべき道が開けたような、そんな心地よい余韻に浸っていたのだと思う。
このわずかな時間が、その後の災厄を招くとも知らずに……。
「修繕殿がお呼びじゃと？　やれやれ、ではここを頼むぞ」
廊下で大きな声がした。上役に呼ばれたらしい月江老が立ち去っていく。
その足音がお廊下の彼方に消えていったと思った刹那、お書物庫の扉が、ガタリ、と鳴った。
スーッと、開く。誰かが入ってくる気配。
空気が、不意に澱んだような気がした。それは直感のようなものではあったが、私は反射的に書棚の影に縮こまった。
目の前に、人影が立った。目つきの鋭い、若い足軽である。確か、月江様と同じこのお書物庫のお番役を務めていた……。
足軽は私に気づかず、目の前のお棚を目を凝らすようにして探っている。
やがて
「あった」
小さくつぶやくと、一冊の本が手に取られるのが見えた。
辺境外史。
私がつい先刻、そこに戻したものだ。
「ついに……見つけたぜ」
にやりとつぶやく。そこに浮かんだ冷酷な笑みに、私は思わず身

をすくめた。
この人はただの足軽ではない。
私の脳裏に、先日の光景が鮮やかによみがえった。
お書物庫の屋根に張り付いていた影。一人は捕えたが、もう一人は逃げ去った。
もし、もしも。
あの逃げた一人が、この男であったのなら。
誰にも知られず、何度も荒らされたと言うお書物庫。もしそのお番役の一人が一役買っていたのだとしたら、これ以上やりすい“仕事”はないだろう。
謎の足軽が、私の推測を裏付けるような行動に出たのはその時だった。
懐に本をしまうと、代わりに取りだした小さな手鏡。西側の窓に近づくと、彼はそれを表に向けてピカリ、ピカリと閃(ひらめ)かせたのだ。
合図にこたえて彼方から、明らかに手鏡のではない強い光が走る。それは一瞬のことだったが、私の記憶を刺激するには十分だった。
光が答えたのは、三日前の夜、お天守から見た西の山の中腹だった。

やがて足軽は、私に気づかないままお廊下へと出て行った。このまま何食わぬ顔でお勤めを終え、懐の本を抱えたまま仲間の元に戻るのだろう。
城内では、誰も気づいていない。たった今それを目撃した私以外に、事を見破る人もいないだろう。お書物庫の本が、今日一冊無くなったからと言って、誰が先日までの派手な盗みと結び付けるだろうか。
私はしばし考えた。すぐに凌介様に、と思ったが、お書物庫の扉にはあの足軽が番をしている。今ここで、姿を見られるわけにはいかない。しかし月江様が戻ってからでは、捕える機会を失うかもしれない。　ちょっと所用で、と入れ替わりに外に逃れればいいわけ

だから。
ふと、窓に目が言った。
電撃のようにひらめきが走る。
調練！
そうだ。ここから合図を送ればいい。凌介様はすぐ下にいる。きっと、解って下さるだろう。
私は窓に駆け寄った。ちょうど、見下ろした場所を凌介様と真咲様が連れ立って、長屋の方へ戻っていくところだった。調練を終えたらしい。今は長屋で待機していなければならないのに……と、お旗女としての責任感がうずいたが、それどころじゃない、と気を取り直した。そのまま窓から大きく身を乗り出し、必死で手を振る。
「なんじゃあ？」
真咲様が先に気付いた。続いて凌介様も上を向く。危ないところだった。閃くのがもう少し遅ければ、お二人は立ち去ってしまっていたのだ。
私は必死でお書物庫の中を指さした。扉、扉。続いて矢を射かけられた曲者の真似。
傍目（はため）にはとても滑稽なものだったらしく、真咲様が吹き出すのが見えたが、凌介様はじっと私の動きを見ていた。と、不意に彼の目が大きく見開かれた。
通じたのだ！
すぐに行く。お前はそこを出ろ。
凌介様が手で合図する。ああん？　といぶかしげに真咲様がそれを見ている。
えっ、窓から！？
どきっと、身を引く。凌介様の合図は変わらない。

窓の外に隠れていろ！

窓の外には小さな張り出しがあった。そこにしゃがめば、中から身を乗り出して覗きこまない限り、人がいるとは解らないだろう。

得心した私が、窓から出ようとした時だった。

いきなり背後から、顔に布を巻きつけられた。

一度に視界が黒くなる。鼻も口も塞がれて息が出来ない。

アッと思う間もなく、胸に太い腕が回される。

「朝芽っ！」

凌介様の叫び声を後ろに、私はお書物庫に引きずり込まれた。

冷たい床に体が投げ出された後も、自分の身に何が起こったのか分からず、私は無我夢中で顔に巻かれた布を外そうと手をかけた。その手が腕ごとぐっとねじあげられる。目元の布が少しずれ、周りの情景が飛び込んできた。

私はお書物庫の床に抑えつけられていた。そして胸の上には、ぎらぎらと光ったあの若い足軽の姿。

その口元が、にやりとゆがんだ。

「まさか、人がいたとは」

腕が折れるほどに締めあげられ、私は思わず悲鳴を上げた。しかしすぐに黒布が口に押し込まれ、くぐもったうめき声に変わる。

もがく私を軽々と抑えつけた足軽は、感情のない、ぞっとするような目で私を見下ろしながら、腰の短刀を引きぬいた。真っ赤な蜘蛛の彫り物のある、足軽にはおよそ不似合いな刀だ。しかし、その斬れ味は間違いなく鋭いのだろう。

「殺すには惜しい、いい女だが、お前の骸で伝えてやろう。長浜国は、強大な敵を懐に抱えている、と。」

布ごと口をふさいでいた冷たい手が、顎から喉元にすっと滑り、私は思わず顔をそむけた。

「天守(てんしゅ)に生首をさらす。女の首を刈るのは大仕事だ。クク……脂(あぶら)が多いからなぁ。だが、お前の主がここまで上がって来るまでに、十分時間はあるだろう」
私の心に絶望が走る。お城は外敵に攻められた時のために何重もの複雑な道が敷かれている。曲がりくねった通し道。階段。御門。見下ろせば真下でも、確かに、凌介様がいた中庭からこのお書物庫までは、かなり遠い。

紅玉があれば…！
絶望の脳裏を禁断の言葉がかすめた。あれさえあれば、この窮地を脱する事が出来る。しかし、紅玉は、今は長屋のつづらの中だった。観滝社殿(みたきしゃでん)の東門で禁を犯しかけて以来、私は二度と同じ過ちを犯すまい、と敢えて肌から離したのだ。それを今、こんな形で後悔しようとは。
しかし、すぐに私は自分を恥じた。どんな窮地でも、あの力に頼ろうとするなんて……！
私は、抵抗をやめた。全身から力を抜く。
その一瞬、足軽は怪訝(けげん)な顔になったが、すぐににやりと酷薄な笑みを浮かべた。
「女にしては珍しい諦めの良さだな。……いい子だ。その方が痛くない」
相手の力がふっと緩んだその瞬間！
私は全力で胸の上の体をはねのけた。転がりながら跳ね起きて、口の中の布をむしり取ると扉に向かって走りだす。引き手をつかんだ。思いきり引き開ける。ガツン！　と両手に抵抗がはしった。扉は、びくともしない。ハッと手元を見ると、内側からカギがかけられている。
しまった、と思ったその瞬間、私はすさまじい勢いで後方に引きもどされた。
髪をつかまれ、のけぞった首に氷のような刃がピタリと当たる。

「さあ……時間だ」
耳元で、笑いを含んだ声がささやく。
寒気が走った。
足軽は、その格好のまま最初の窓のそばに私を引きずっていくと、ギラリと短刀の刃先を返した。
「油断したよ……クク……だが数秒じゃ運命は変わらない。」
今度こそ殺される！
すさまじい恐怖が押し寄せてきて、私は思わず絶叫した。
「凌介様！　助けて…！」
その時いきなり閃光が走った。それはとっさにのけぞった足軽の胸元を、間一髪でかすめ去った。窓から飛び込んできた黄金色の影が、飛燕のように抜き打ちを放ったのだ。
足軽が飛び退く。思わずへたりこんだ私の前に立ちはだかった胴巻姿の凌介様が、腰を低く落とし、短刀を構える。
「運命を変えるには、数秒あれば十分だ！」
怒気を含んだ鋭い声で、凌介様は叫んだ。
「俺のお旗女に手を出すな！」

狭いお書物庫の中で、すさまじい闘いが展開された。
間髪をいれず、凌介様は猛烈な速度で立て続けに斬りかかった。あの足軽が、かろうじて受け返している。
ドカン！　バシャッ！
重い体がぶつかるたびに、書物が吹っ飛び、木棚が砕ける。
バシイッ！
凌介様の渾身の一撃。それは蜘蛛の小刀を粉微塵に砕いた。すさまじい破壊力だ。
足軽が後方にトンボを切って、次の刃をすんでにかわす。間髪をいれず凌介様は相手の懐へ飛び込んだ。踏み切りざまに回し蹴りを放つ。ぐう！　とうめいて足軽が吹っ飛ばされる。まるで光が走っ

ているようだ。速い。息もつかさぬ凌介様の攻撃が、謎の足軽を追い詰めていく。

しかし足軽も相当な使い手だった。吹っ飛ばされた先の壁を蹴り、とっさに懐から取り出した握り刃(やいば)を逆手に構え、空中から凌介様に飛びかかった。

ガッキィーン！

金属のぶつかり合うすさまじい音がして、バッと、影が左右に飛び分かれる。

勝負はほぼ五分と五分だ。語ると長いが、実はほんの数十秒の出来事である。

「朝芽！　逃げろ！」

相手の繰り出した必殺の一撃を、渾身(こんしん)の力で受け止めながら凌介様が叫んだ。私は必死で頷くと、押し合う二人の横をすり抜け扉の内鍵を引き抜いた。足軽が私に蹴りを飛ばす。凶悪な一撃が私の胸を直撃しようとした瞬間、凌介様が横っとびに走り込み、逆回転に回し蹴りを放って、寸前でそれを受け止めた。

ヴァキイ……ッ！

吹っ飛ばされた足軽が、木棚に叩きつけられる。

「早く出ろ！」

短刀を構えながら必死の形相で凌介様が叫ぶ。扉を引き開けた私は、不意にすさまじい悪寒を感じて振り返った。

足軽の様子が変わっていた。

棚に叩きつけられたままの姿勢で、顔だけを上げてこちらをじっと見ている。その目が不意に赤く光った。

来る！

私の中で何かが絶叫した。それはおぞましいまでの感覚だった。足軽は、にやりと笑うと両手を胸の前に掲げた。その指先から、赤黒い妖気がすさまじい勢いであふれ出すのが、私の目に……おそら

く私の眼だけにはっきり写った。
「危ない！」
叫んだ私はとっさに凌介様に飛びついた。妖気が爆発する。それは猛烈な風の塊となって、扉をぶち破り、私たちをお廊下の端まで吹き飛ばした！
血がしぶく。二の腕がざっくりと裂けていた。あまりの衝撃に足がガクガクして立てなかった。お書物庫から、笑みを凍りつかせた恐ろしい形相の足軽が出てきた。それはすでに人の表情ではない。
グイッと腕を掴まれた。凌介様がよろめきながら、それでもすさまじい力で私を引き起こす。
「俺の後ろへ！」
片膝をつきながら、それでも凌介様は短刀を構えた。私は激しく首を振ると
「逃げて凌介様！　私たちではかないません！」
「何だって！？」
「あれは人間ではありません！　私には解ります。あれは！」
私と同じ世界の……！
辺りが白い閃光に包まれたのは、その時だった。きらめくような光の帯がまき散らされ、爆発する。
凌介様が私の体をつかむ。そのままぐっと胸元に引き寄せられた。地面につっぷす。瞬時に視界が真っ暗になり、耳の奥に、ただ温かい鼓動だけが響いてきた。
ああ……これは、凌介様の心の臓の……
その時、聞き覚えのある声が、凛と辺りに響き渡った。
「お城を騒がす佞人よ。覚悟をいたせ」
私はうずくまっていた腕の中から、おそるおそる顔を上げた。すぐ上には、愕然と目を見開いて固まっている、血しぶきにまみれた凌介様の横顔が見えた。

目の前のお廊下では、まるで蜘蛛の糸のように伸びた白い網に、足軽が絡(から)めとられてもがいていた。
駆けつけた真咲様とその隊下が、わあわあ騒ぎながら、それを遠巻きに取り囲んでいる。
そして、押し寄せた天槻兵の輪の中央で、唯一人その拡散している網の根元をしっかりと握っていたのは……
ほかならぬ月江老だったのである！

「油断したわ、日和爺(ひよりじじい)。全く害のない同役だと思うていたに」
糸に巻かれたまま、足軽が、どすの効いた声で笑った。
「そなたを同輩と思うた事はない。山賊頭、渕上幻奇(ふちがみげんき)！」
老人の声はまるで一騎打ちに挑むいにしえ武将のように、朗々とあたりに響き渡った。
どよめきが走る。
凌介様も驚いたようだ。
渕上　幻奇…！
泣く子も黙る妖術使い。それこそ、この度の騒動を部下に命じた張本人の名ではなかったか。それがまさか、自ら番役として城内にもぐりこんでいたとは……
「ククク…おぬしこそ、ただの爺いではなかったわけか。」
足軽……渕上幻奇と呼ばれた妖術使いは、面白そうに肩をゆすった。
「我が名は妙法院少憬(みょうほういんしょうけい)。長浜忍軍、妙法院党の頭領じゃ。土岐定照様のご下命を受け、この地に潜んでおった」
どよめきがはしる。
私は衝撃を隠せなかった。あの日向のようなにこやかな老人が、まさか本城屈指の忍術軍団の頭領だったとは……！　お書物庫で聞いた、清冽(せいれつ)な声音がよみがえる。そうだったのか。あの声は……厳しい任務に就く大重臣が、一(いち)お旗女の心得違いを、親身になって叱ってくれた声……。

「同番役になったも何かの縁じゃ。おぬしには処刑場まで付きおうてやろう」
老頭領が、淡々と答える。
「処刑、か。ククク……。だが、それは先の楽しみに取っておけ」
うつむいていた足軽がくいっと顔を上げた。その目が再び赤く光る。
「それまで寿命が持てばだが」
「いかん！」
月江老がグイッと白網を引いた。しかし一瞬早く、すさまじい叫び声がとどろきわたり、辺りが一瞬で真っ黒になった。巨大な烏(からす)が次々と窓から踊りこんできた。すさまじい羽風。悲鳴を上げ混乱する兵士たちを尻目に、握り刃で網を切った渕上幻奇は、ひときわ大きな烏の足をつかむと、窓から外へと飛び出していった。

恐ろしい刻(とき)は終わった。
山賊頭は、妖鳥とともに姿を消し、後には再び破壊されたお書物庫と立ち騒ぐ足軽たち。
あまりの不可思議な出来事の連続に、いつもの軽口を忘れ呆然としている真咲様。
そして、傷だらけの凌介様……。
凌介様は、すべてが終わった瞬間、崩れるように膝をついた。あわてて駆け寄り、肩を支える。真咲様が飛んできた。
「凌介！　大丈夫かおい！」
「影……」
凌介様が、肩で息をつきながら、のろのろと顔を上げる。それから二人は、示し合わせたように私の方を振り向いた。
「お前、立派に守ったじゃねえか。」
真咲様が、妙に嬉しそうな声で言った。
「そうすると言ったろ」

ぐったりとほほ笑んだ凌介様は、私の腕をつかむとぐっと引きよせた。
「あんな外道(げどう)に、負けてたまるかって」

「朝芽」
月江老……今では本城忍軍の長である老頭領様が、私の名を呼んだ。真咲様と凌介様があわてて平伏する。私も一歩下がって、低く頭を下げた。
「危ない目に会わせたの。わしがもう少し早く駆けつけてやればよかった。だが、」
老人は、凌介様の血にまみれた黄金色の胴巻を見つめ、
「……良き主を持ったな。これからも励めよ」
「はい」
私は泣きそうになるのをこらえながら顔を上げた。月江老の変わらぬ笑みがそこにあった。
「しかし……妙法院様」
私の前で、凌介様が、沈んだ声で言った。
「大切なお書物がまた奪われてしまいました。力至らず、申し訳次第もございませぬ。」
「なんの。謝ることはない」
一度言葉を切った月江老は、にやりと笑うと
「あの“辺境外史”は、偽物じゃよ。」
「えっ？」
「本物はとうに長浜の本城に送ったわ。わしの情報網も、そう捨てたものじゃない。あれは、わしが書き写したものじゃ。朝芽に貸した時からすでに、わしの網は張られておったのじゃよ」
まさか同番役に化けていたとは、思いもしなかったがなと言って、月江老は豪快に笑った。
「偽物……月江様が書かれた……」

私は混乱する頭から、かろうじて言葉を絞り出した。
「では、あの、杵築村全図は……」
「ああ、あれはわしが数年前に訪れた村でな。原本にはなかったものだが、ひときわ心に残っていたので、新たに書き足してみたのだよ。杵築村五郷は、面白い村でな。今も生きた伝説があってな。」
「伝説……？」
不思議そうに問い返した凌介様に、月江老は、秘密を語る口調で、おごそかに言った。
「鬼が、いたのだよ」

これは、後に真咲様から聞いた話だ。

あの時、私が窓から消えたのを見て、凌介様はとっさに長屋の柱に飛びついたのだそうだ。
そのまま屋根から二の丸へと凄まじい速さで飛び移り、ほとんど直登でお書物庫まで駆け上がった。普通に階段やお廊下を回っていたら、おそらく私の命はなかっただろう。
「元々素早いヤツだとは思っていたが、あれほど速いとは思わなかった。あんなに血相を変えた凌介は、初めて見たぜ」
真咲様は信じられないと言うように首を振った。

（4）

斜陽が差す日暮れの長屋で、私は凌介様の傷のお手当てをしていた。
あれから数刻が過ぎていた。天守では、妙法院様を囲んでご城主様や重臣の歴々が、山賊討伐について議論を戦わせているようだ。

凌介様の体には、大きな怪我こそなかったものの、それはもう数え切れないほど斬り立てられた刀痕があり、闘いのすさまじさを物語っていた。
凌介様は無言。私も無言だった。
傷口を清水でそそぎ、包帯を巻いていく。それは奇妙に静かで、穏やかなひとときだった。
一通りのお手当てが終わった時、凌介様が、ポツリと呟いた。
「……朝芽、すまなかったな。調練に呼ばず、お前を一人にしていた為に、恐ろしい目に合わせちまった。俺が守ると誓ったのに。」
夕日に照らされた横顔が、沈んでいた。しなやかな体躯は少しうつむき加減に、栗色の髪がその表情を隠している。
私は、盥（たらい）を置いて、その横に端坐（たんざ）した。
「いいえ」
まっすぐ、凌介様を見つめる。ゆっくりとこちらを見上げた寂しげな瞳に、私はにっこりとほほ笑んだ。
「全力で、守っていただきました。おかげで、こうやってまだ、お仕え出来ます」
「……そうか」
「来て下さって、嬉しかった。私は幸せです。」
私は、心を込めてそう言った。
凌介様の口元にも、笑みが浮かんだ。そのまま視線を、彼方に向ける。金色の雲が輝く西の空。
「疲れたな……。今夜は共に飲もうか」
何かを吹っ切るように、不意に立ち上がった凌介様は、私の手をぐっと握ると、夕日に向かって歩き出した。

〈続く〉

第四章　不幸のお守り・前編

（1）

夜明けの鐘が、日ごとに早く鳴るようになった。
まだ暗いうちに起きて東の彼方を眺めれば、春とは違った力強さで、空が明るんで来るのが解る。空気はどこか湿り気を含んで温かく、やがて来る梅雨の季節を予感させる。長浜国は、新しい夏に入ろうとしていた。

その日は朝からよく晴れていた。日差しが強く、立っているだけで汗ばみそうな陽気だった。
私は通用門で、出入りの鍛冶職人と調練で傷んだ直槍（すぐやり）の打ち直しについて話しあっていた。早朝の調練を終えたばかりの天槻城（あまつきじょう）はあわただしかったが、私が今いる、日常小者たちが使う黒塗りの通用門は、比較的静かだった。　本丸のお台所から、朝餉のおいしそうなにおいが漂ってきている。職人さんのおなかがぐうと鳴って、思わず二人で笑い出す。そんな話し合いの中、気になっていた値段交渉も、
「朝芽（あさめ）さんの顔を立てるよ」
と、お腹の虫のお陰で親しくなった職人さんの好意で、無事終えることができた。私は喜んで礼を述べた。
鍛冶屋が帰ると、私は受け取った預かり証文を勘定役（かんじょうやく）に渡すため、本丸雑仕所に続く急峻な階段を上って行った。かなりおまけしてもらったのが嬉しくて、足取りも自然と軽くなった。

雑仕所への道は、天槻城の中で一番きつい心臓破りの坂道で、左には高くそびえた石垣の壁、反対側には深い雑木林が続いている。
階段の途中で、ふと、私は足をとめた。
どこかで、弱々しい声が聞こえたような気がしたのだ。
「……どの、そこ行くお女中どの」
間違いない。右手の雑木林の中だ。誰かが私を呼んでいる……？
私は、おそるおそる林の中を覗き込んだ。目の前は少しえぐれたような溝になっており、一段低い地面を下草が一面に覆っている。そのシダやコケで埋もれた土中に、黒い具足がもぞもぞと動いた。
「怪しい者ではない。わしは、高砂備中と申すお城の将で……」
「備中様！」
叫んだ私は慌てて駆け寄った。
それは、あまりによく知っている名前だった。
正式には、高砂備中守長盛とおっしゃる重鎮で、長柄足軽隊大隊長……凌介様や真咲様をもう一段上で束ねる、天槻城の将軍の一人である。私も何度かお目にかかったことがあったが、五十路を超えた磊落な武人で、お酒が入るとやたらと力比べをしたがる闊達なお人だ。
「おう、そなたは出石のお旗女殿か」
あちらも、私のことを覚えていてくれたようだ。
「いかがなされたのですか」
駆け寄った私に、備中様は痛みに歪んだ汗まみれの顔で、拝むように言った。
「すまんが、そなたの主を呼んできてくれんか……。崖から落ちてな、腰が……わしの腰が、……」
そこは、階段から少し下がった雑木林の入口に過ぎなかったが、お気の毒な備中様は、まるで険しい崖から落ちたような心持ちがしていたに違いない。おそらくかなりの勢いで転げ落ちたのだろう。しかし、戦場では鬼とも呼ばれ、調練では凌介様や真咲様をも容赦なく叱り飛ばしている熱血漢の備中様が、おかしな格好で腰を突き

だし、あまりにも悲しそうな声で唸るので、同情しつつも、思わず吹き出しそうになる。
「すぐ参ります。今しばしお待ちくださいませ」
あわてて顔をそむけた私は、中庭の凌介様を呼びに、ここまで登ってきた階段を走り下りた。

「不幸のお守りぃ？」
真咲様が素っ頓狂な声を上げた。
その声は、調練が終わったばかりの中庭に、ビンビンと響き渡った。
「叱ッ！　声でかいって」
凌介様が制する。
時間はあれから少し後、凌介様をはじめ、駆けつけた一番隊の兵士たちにより、備中様が無事お屋敷へと助け起こされて行ったその後のことである。
「備中殿が先日樺山社（かばやまやしろ）で買ってきたんだが、以来、あまりに不幸が続くんで、俺らに返して来てくれってさ」
「はあ？」
備中守様は、最近立て続けに不幸に見舞われているらしい。
三日ほど前には、屋敷でボヤ騒ぎがあり、次には可愛がっていた愛馬が足をくじいた。つい先日は、他城への昇進栄転にも外れたと落ち込んでいたと言う。
「チッ、高岡（たかおか）城主に栄転か。あのタヌキ親父め、隠れて運動してやがったな。」
「とにかく、それが駄目になったのも、そのお守りのせいだと固く信じてんだよな、備中殿は」
「しかしよぉ」
真咲様が仏頂面で続ける。
「それならオヤジが自分で返しに行きゃいいじゃねぇか。なんで俺

たちが……」
「ぎっくり腰で寝込んじまったよ。登城中雑木林で滑ってな」
凌介様は、笑いを含んだ目を私に向けて、
「朝芽が通りかからなかったら、ヤバかったってな」
「おい、マジかよ……」
真咲様の顎が、げんなりと落ちる。
「不幸のお守りだなんて、冗談きついってね。ま、野暮用はさっさと済ますに限るさ。気の毒な上役殿のために、ひとっ走り行って来ようぜ」
流れる汗をぐいとこすった凌介様は、私を見て明るく言った。
「朝芽も来るかい。こんな任務だけど、樺山社は行ったことないだろ？」
「なら、俺もあいつを連れてってやるか。」
真咲様がにやりと私の方を見る。
「水杖（みなづえ）も、よろしいのですか？」
「おう。お前ら仲いいんだろ。呼んできてやれよ。」
「ありがとうございます！」
私は喜んで親友を呼びに走った。

久しぶりの城外である。山はすっかり様相を変え、新緑の薄芽はすでに濃緑の若葉に成長していた。
季節遅れのフジの花が、濃厚な緑の山肌に、紫色の彩りを添える。見上げればどこまでも青い空に、千切れ雲が白く浮かんでいる。日差しは変わらずきつかったが、山を分け入るにつれて空気はぴんと張り詰め、谷間を走る渓流の爽やかな音と共に、汗ばんだ体を冷やしてくれた。
仙境とも見まごう美しい奥山の小道を、一頭の馬に小荷物を乗せて、私たちは連れ立って歩いた。噂のお守りも、白木の小箱に封をして、馬の背にくくりつけてある。

樺山社までは山道を約三里。騎乗なら一刻もかからぬ距離だが、険しい山また山の奥にあるため、徒歩で４時間ほどを見越していた。
「嬉しいな、朝芽とこうやって歩けるなんて。まるで観滝社殿(みたきしゃでん)に戻ったようね。」
水杖がはしゃぎながら言った。
主二人は馬を引いて先に立ち、私たちは従者の立場を意識しつつも、美しい景色に心も弾み、ついついおしゃべりに花を咲かせていた。
「炊事場のお当番はうまく決まったの？」
「手配はしてきたけれど、少し心配だわ」
夏草の香立ちこめる山道は確かに昔を彷彿とさせてくれたが、お旗女としての仕事の話が増えたのは、私たちの中の変化の一つだ。
「朝芽」
ふと、水杖が笑みを浮かべて私を見た。
「それで、どうなの。出石様とは？」
「ちょっ……やめて、そんな大声で」
私は赤くなって、拒否するように手を振った。
「お城中の噂よ。危機に陥ったあなたを助けに、冷静な出石様がすさまじい活躍をした話」
「あ、あれは……」
思わず絶句する。つい半月ほど前のお書物庫での事件がよみがえり、私はぶるっと首を振った。
「誰だって同じことだったわ。凌介様は部下を大切にされる方だもの」
噂は間違いではない。私が今こうして元気に歩いていられるのは、凌介様がそれこそ命がけで助けて下さったからだ。
でも、それ以上の意味を考えることは、今は僭越(せんえつ)に思えた。
「来て下さった、それだけでもう十分よ」
「……そうね。ごめんね」
その声に一抹の寂しさが含まれているように聞こえて、私は思わ

ず友の顔を見た。水杖は少し目を伏せて歩いている。
「……助かったからこうやって笑い話にも出来るけど、朝芽は怖い目に遭ったんだものね」
「いいのよ。済んだ話だわ。」
私は明るく言った。あの事件の後はしばらく夜も眠れず、駆けつけた水杖によく慰めてもらったものだった。
「水杖、なにかあったの？」
「ううん」
言い渋る水杖にあれこれ問いただしてみると、やがて、一つの出来事が浮かび上がってきた。

つい先日のことである。
真咲家には、水杖のほかにも幾人かの下働きの女性たちがいる。彼女たちの主な仕事は、炊事や洗濯と言った日常の雑務だが、主である真咲様の起居に深く関わる者もいて、中にはゆくゆくは主の傍らに……と想いをかける女性もいるらしい。
真咲様は派手好みで、性格も豪胆な威丈夫だ。色鮮やかに染められた京風の鉢金に、先祖代々の深紅の鎧。鎧の下に着る軍衣もあでやかで、黄金色の長槍を突いて馬上にある姿などは、まばゆいばかりの輝きと存在感を放つ。毎晩の酒量も豪傑にふさわしく、酒樽を抱えてあちこちの軍営で飲み明かすとか。それでも一線をピタリと引いているところがあり、浮いた噂ひとつ聞こえないのは、御奉公一途な一面も強く持っているのだろう。
そんな主を持つ真咲家の女中たちにとって、この度お側に上がった新参の水杖の存在はかなりの脅威と映ったらしく、
「あのような小娘に先を越されては」
と、嫉妬と焦りの波が彼女たちの間に広がったとか。勿論、水杖はお役目第一と心がけ、明るく勤めて来たのだが……。そんな先日、奥女中の中でもひときわ美貌で有名な一人が、下城する真咲様に大胆に言い寄ったと言うのだ。

「聞きましたわ、殿のご親友が、一旗女の為に勇を奮ったお話を。殿も、もしわたくしが危うい目にあったなら、助けてくださいましね……？」

大人の色香でしなだれ続けるその女性を、最初は軽くあしらっていた真咲様だったが、その言葉を聞くやいなや、すさまじい大声で怒鳴りつけたそうだ。

「馬鹿野郎！　甘えんじゃねぇ！　てめえの身くれぇてめぇで守れ！　そいつが真咲家臣の心がけってぇもんだろうが！　だから女はめんどくせぇ！」

雷のような大声に、妖艶な美女も顔色をなくして奥へ逃げ込み、座は一度に静まり返った。水杖はその時、明日の調練の朱書きを持って別室に控えつつ、この一部始終を聞いていたのだった。

「影芳（かげよし）さまは、本当はお旗女も置きたくなかったのかもしれないわ。長浜の掟だからしぶしぶ従っているのかもしれない。あの方は戦場や調練が何よりの生きがいでいらっしゃるから……。そう思うと、私、なんだか自信なくしちゃって」

「水杖……」

そんなことない。

私は思った。確かに武骨で単純な物言いが目立つ方だが、観滝社殿で水杖に見せた優しさは、今も私の中にしっかりと焼き付いていた。今日だって、すぐにお供に呼んでいたではないか。

水杖を疎んじていらっしゃるはずがない。

しかし、それを根拠に大丈夫よと、落ち込んでいる親友の背を押す事はなんだか安易な気がして、私は結局何も口にすることができなかった。

重い沈黙が辺りを支配したとき、

「おう～い！　お前ら早く来い～！　休憩しようぜぇ休憩！」

彼方で当の真咲様がのんびりと呼ぶ声がした。傍らで凌介様も振り返っている。

気まずい呪縛がすっと解け、救われたように顔を見合わせる。
水杖は大丈夫よ、頑張るわと言うように、にっこりと笑った。私たちはハイッと叫び、弾かれたように駆けだした。

（2）

「……最悪だ」
真咲様が凶悪な顔で天を仰ぐ。
「こりゃないよな……」
凌介様もため息をつく。
さっきまでの晴天がうそのようなすさまじいどしゃ降り。私たちは、騒ぐ馬を苦労して導きながら、大きな木の下に駆け込んでいた。
天が光る。アッと思った瞬間、すさまじい轟音が耳をつんざいた。激しい稲光。頭上をにわかに覆った黒雲が、見る間に彼方の山を隠し、その中を蟻のようにゆるゆる進む私たちに、すさまじい牙を剥(む)いている。初夏の嵐が、本格的に山全体を覆おうとしていた。
「不幸のお守り、早速発動ってか！」
落雷にいななく馬をなだめつつ、馬から自らの腰に巻きつけ直した白木の小箱を不気味そうに見ながら、びしょぬれになった凌介様が苦々しげに言った。
「冗談じゃねぇぜ！　あと何里だ！」
吹きすさぶ暴風に逆らって、真咲様が叫ぶ。
「さあてね！　迷子にならなけりゃ二里ってとこか」
私と水杖は、馬の背から下ろした荷物を、急いで雨よけの油紙で巻いていた。大木の下とはいえ、横殴りの雨は容赦なく吹き込み、荷物も、着物もすでにぐしゃぐしゃだ。
稲光がまたも天を切り裂き、落雷の度にどおん！　と大地が揺れる。

不安そうに上を見ていた凌介様が、意を決したように叫んだ
「ここはまずい。出るぞ、影！」
「正気かよっ！　この雨だぞ凌介！」
真咲様が叫び返した瞬間、
ピアッ！　と閃光が辺りに走り、
ズッガアアアン！
大音響と共に地面が揺れた。空気が爆発したかのような衝撃。反射的に私は水杖の手にしがみついたが、その手が引きちぎられるようにして離れ、私は単身、どしゃ降りの山肌に吹っ飛ばされた。
今の木に落ちたんだ！
思った瞬間、急な斜面に叩きつけられ、頭が真っ白になる。私の頭上で空荷の馬が棹立ちになり、どうっと足を滑らせて倒れ込む。次の瞬間、その姿は巨大な壁のように私の上にのしかかってきた。考えるよりも早く思いきり横に体を投げ出す。泡を吹いた馬の巨体が、すれすれのところを地響き立てて転がり落ちる。手綱が生き物のようにうねって私の足を払った。あっと思った時には、私の体はバシャン！　と引き倒され、馬の後を追って、泥で滑る斜面を転がり始めていた。
「ああっ……！」
夢中で周りの小石をつかむが、爪がむなしく泥しぶきを飛ばすだけで全く手ごたえがない。足の先には狂奔して落ちていく馬、その更に先には深い谷間がぱっくりと口をあけている。
「凌介！　朝芽が落ちた！」
水杖をつかむように引きよせた真咲様が蒼白になって叫んでいるのが、頭上にちらりと見えた。
見る間にその姿が遠くなっていく。
狂奔していた馬の姿がすっと見えなくなった。
絶壁から落ちたのだ！　続いて私の足元いっぱいに、暗く蒼い谷間が開け、もう駄目…っ！　と観念の眼をつぶったその瞬間……！
ガッと腕を掴まれて、体がガクン！　と宙づりになった。間一髪、

私の体は宙に乗り出すようにして止まった。小石がばらばらとはるか下方へ降り注ぐ。
「目的地はそっちじゃないって！」
全身泥だらけの凌介様が、引きつった笑みを浮かべつつ、間一髪引き止めてくれたのだ。
真咲様の叫びに、崖道を飛んできてくれたのだろう。
「す……すみません、私……」
「いいって！　歩けるか！」
そのまますさまじい力で引き揚げられ、たくましい腕に支えられる。泥土でずるりと滑る足元を慎重に踏みしめつつ、私たちは一歩一歩、険しい斜面を上がり始めた。
「馬が……」
「ああ。気の毒だったな……」
低くつぶやいた凌介様は、パッと振り払うように顔をあげて、
「チッ！　想像以上の神通力だ。どこまで不幸を呼ぶんだか！」
忌々しげに腰の小箱をにらみつけた。私も思わず、その小箱を見つめた。
「しっかりつかまってろよ、朝芽。もうちょっとだから」
私の視線に気づいたのか、凌介様が不自然に明るい声を上げる。
真咲様と水杖が、懸命に手を差し出してくる。
しっかりとその手につかまった時、私の全身に初めて震えが襲ってきた。

〈続く〉

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1247ba/

長浜☆戦国時代

2012年1月6日23時01分発行